

山びこ通信

2010-2011

冬

山の学校
クラス紹介

Disce libens.

「終わり」は「始まり」——「根っこの教育」を大事にしたい

文・山下太郎

この「山びこ通信」がお手元に届く頃、卒業式も間近である。「卒業」にあたる英単語は何かと思って和英辞典を引くと commencement という言葉が見つかり、ちょっとびっくりする。commencement は、もともと「始まり」を意味する言葉だからである。一方、「卒業」の「卒」を漢和辞典で引くと「終える」という意味が見つかった。視点の相違が興味深い。

「卒業」といえば graduation を思いつく人の方が多いだろう。語源はラテン語の gradus (グラドゥス) で、「階段、段階」を意味するⁱ。つまり、階段を一步ずつ登るイメージが graduation という英語にはこもっている。「終わり」は「始まり」、これからも一步一步「学びの山道」を登っていこう！——「卒業」を意味する英単語の投げかけるメッセージはこう解釈できるかもしれない。

山道を登っていると、見晴らしのよい場所で立ち止まるのが人の常。眼下に広がる町並みを眺めるとき、あるいは遙かにそびえる山並みを仰ぐとき、清々しい気持ちになるものである。私のイメージする卒業式とは、そんな「山登りにおける小休止」といった趣をもつ。ちょっと我に返ると、今来た道と変わらない「階段 (gradus)」が、相変わらず上方に続いている。私たちは、人として学び続ける限り、一生このような形で階段を登っていくのだろうか。山頂に近づくと、どんな景色が見えるのだろうか。「山の学校」は、そんな登山家に頼られるシェルパの存在でありたいと願っているⁱⁱ。

ところで、どんな山にも「ふもと」の広がりがないければ「頂き」は存在しない。「学びの山」の「ふもと」とは何であるか。これを形成するのが「幼児教育」である。しかるに昨今の「幼保一体化」の議論を聞いてみても、また、OECD 諸国と比べ極端に少ない公的助成に照らしても、我が国にはこの肝心の「幼児教育」を尊重する視点が希薄であると言わざるを得ない。

幼児教育の要諦は、「高い山ほどやる気が出る」という人間を育てることであるⁱⁱⁱ。この教育力が弱まれば、日本の教育全体が劣化していく。山の中腹で大学の先生が待てど暮らせど、真にやる気のある人材がそこまでたどり着かない。仕方がないので、先生たちが山道を登りやすく整地したり出迎えに行ったり、あげくはケーブルカーの設置を検討したりする。これが今の大学の姿ではないか。

しかし、これは大学教育の責任ではない。つきつめれば、幼児期の教育の欠落が問題なのである。幼児教育は、一人一人の「努力」を見守り、くじけそうな心を励ます。「見

(次ページへ続く)

守る」とは、安易に手をさしのべない、という覚悟の表れである。この子にはできるはず、と信じて待つのである。まさしく「かわいい子には旅をさせよ」の精神が幼児教育の真髄と言ってよく、この教育は子どもだけでなく「かわいい子ゆえ旅をさせたくない」親の意識改革にも責任を持つ。

幼児教育の「終わり」(卒園)は新たな学びの「始まり」である。これは学齢としてそうなるだけでなく、生涯を通じ真に学び続ける人材を世に送り出す点でそのようになる。ところが小学校に上がると何かがおかしくなる。「成績」があり「評価」が待ち受けるため、言い換えれば「他人との比較」が公然と始まるためである。幼児教育にこのような「評価」はありえない。自分の意志で「(自分と)競う」(自分の課題・試練を乗り越えようと努める)のと、(親や教師によって)「(他人と)競わされる」のとでは取り組みの姿勢に大きな違いが生まれるのである。

大人が(そして本人が)幼児期の「好奇心」をじっくり「見守る」ことができれば、世の中の「知的好奇心」の輝きもずいぶん増すだろう。それには一人一人の大人が「数値による評価」と一定の距離を置くことだ^{iv}。今の時代は、子どもたちの「好奇心を育てる」と称し、「妙にいじくる」のである。その結果、年齢を重ねるごとに「学びの輝き」はかげりを増していく。大学合格を至上命題とした学習に終始すると、「始まり」(入学)は「(学びの)終わり」になるだろう。

「よかれ」と思って過剰に手をさしのべることは本人のやる気をそぐ。これは幼児教育では常識である。だが、今の学校教育では「試験」に出る「範囲」を先に示し、あげくは解答の「選択肢」まで用意する。これは本当に「知的好奇心」を守る道ではない。先生は、生徒の突拍子もない質問を歓迎できるかどうか。司馬遼太郎氏は、中学校時代、英語が嫌いであった。授業中に「ニューヨークとはどういう意味ですか？」と先生に質問したら、「そんなばかな質問をするな」と叱られたからである。

「山の学校」の母体は幼稚園である点で、まさに今述べてきた幼児教育の精神に根ざした教育——「学び」の根っこを大事にする教育——を展開している。世間に「大学の附属幼稚園」はいくらでもあるが、「山の学校」は、正真正銘「幼稚園の付属学校」である。では、小学校以上の教育がじっさいどのようなまなざしに見守られて成り立つのか。次頁以下をご覧頂きたい。「ユニークだ」と評して下さるお声も届くが、私の本音を述べると、このような教育の実践がむしろ日本の津々浦々で行われ、「当たり前」(ユニバーサル)だと思われる時代が来てほしい。

(北白川幼稚園長・山の学校代表 山下太郎)

ⁱ 英語で「級」を意味する grade(グレード)の語源。

ⁱⁱ このことは前号の巻頭文(「学びの青春時代よ永遠に」)で述べた。

ⁱⁱⁱ ここで言う「高い山」とは「困難」の総称であり、学力を問う問題レベルの高低を意味しない。私は幼児期に小学校の学習を先取り「させる」のはむしろ逆効果であると考えている。幼稚園生活は、「親離れ」の試練、人間関係のつまずきの克服など人格形成に不可欠な様々な試練を乗り越える機会に満ちている。この経験を大切にすることが幼児教育である。

^{iv} 試験結果の「解釈」に幅を持たせること。たとえば、試験で5問中3問正解だと60点である。私の父はこれを「満点だ」と言った。「手をつけた3問については全部できていたから」というのが理由である(残りの2問は時間内にできなかった)。「その調子で残りもできたら本当の満点だ」と励ましてくれた(日頃から問題をじっくり丁寧に解く姿勢は評価してくれた)。逆に、漢字の書き取りの最中、書こうと思った漢字がすぐに思い浮かばず「えーっと」と口にしたとき、その答えはたとえ「正解」でも×をつけられた。「なぜできているのに×なのか？」と問うと、「おまえの名前を漢字で書いてみる」と言う。スラスラ自分の名前を紙に書くと、「それくらい当たり前のようにスラスラ書けないと正解ではない」と言われた。どの言葉も父ならではの解釈を反映していて、子どもにもわかる説得性があった。

『つくる』 講師：福西亮馬 対象：小学生 月曜日 16:30～18:00（隔週）

遊びと学びの接点、「ゲームよりも面白い！」と言える『つくる』クラスを作りたい



『宝の山』はただ黙して語らず。
君たちの挑戦を待っているのだ

『つくる』は工作教室です。そのねらいとは何か？——それは「こうしたらもっとできるかも！」という、小学生たちの「夢」を応援したいということです。

夢とは「自分からしたい」と思って「ワクワクできるもの」のことです。ひいてはそれが「知りたい」「学びたい」ということに根を下ろしていき、「勉強すればもっとワクワクできるはずだ！」という学びそのものへの意識の変化にもつながると考えています。

私がそこで注目したいのは、小学生ならば誰もがおなじみの「がらくた集め」です。何かを作ることに没頭する子どもたちはきっと多くいるはずですが、「しびしび勉強をがんばった、だからあとはゲーム」というような「片手間な勉強」をするくらいなら、ゲームよりも面白いがらくたを相手に「最初から最後まで」夢中になった方が、本当の勉強につながっているのではないか、というのが私の提案です。

よく親御さんからの相談に、「この子は勉強の仕方が分かっていないようなので…」というのがあります。それは「いかにそれまで遊んで来なかったか」ということの告白でもあります。勉強で遊ぶことを知っている人にとって、「どうやって勉強するか」とは「どうやって遊ぼうか」という意味になります。

たとえばノートの取り方一つにしても、興味に従って調べていけば自然とノートは埋まっていきます。そしてその書き方がいくらでも自分でアレンジできることを知って、むしろ「次は何を書き込もうか」と楽しくなります。それは黒板に書かれた分だけを単に写している人には味わうことのできないワクワクした広がりです。このように、「自分で考えて工夫できる人」は、勉強の仕方を知っていることになります。その根っこにあるのは、「次にどうなるか知りたい」という好奇心です。

ところで「勉強の仕方が分からない」という人の中には、その仕方を単に「要領よくすること」と履き違えている人が割合に多くいます。そうではなく、**要領とは試行錯誤の後にやっと生み出される「コツ」のことです。**それは、もし人から聞いたところで自分で工夫を重ねようという主体性がない限り、一向に身に着くものではありません。またそれを得る前の試行錯誤を恐れているから、「分からない」で済ませているのです。

勉強とは本来受身でするものではありません。知りたいと思う気持ちが湧いてくるからこそおのずとずするものであり、そこで知らなくてもいいと思えばそれまでです。またその過程は、はたから見れば「道草」としか映らないこともしばしばあります。しかしそれは「真剣」な道草であり、試行錯誤であり、工夫の道のりです。それを「とことん」突き詰めていけば、必ずや困難にぶち当たる日が来ます。その時こそ、たとえ誰に言われなくても自分でそれを克服したいというモチベーションの湧いて来る時です。我々はそうした彼らの主体性こそを見守るべきではないでしょうか。

「よく遊び、よく学べ」とは昔からよく言われることですが、決して「よく学び、よく遊べ」という順ではないことに注意したいと思います。つまり「勉強したから遊んでいいよ」というのでは、上の意味で本当の勉強をしたことにはなりません。本人自身が「遊びも勉強も！」というのでなくてはなりません。

英語のことわざに All work and no play makes a Jack a dull boy. というのがあります。私はこの Jack とはまさに正反対の、自分で絶えずモチベーションを作り続けられる人を応援したいと思います。

一人でも多くのご参加をお待ちしています。

（文責 福西亮馬）



（廃紙を巻く「ひねもすキット」で製作した飛行機。『つくる』クラスには、幼稚園のひねもす教室の「外伝」的要素もあります）

『歴史入門』 講師：岸本廣大 対象：高校生 水曜日 20:10～21:30

高校日本史・世界史レベルの知識を獲得・整理することを目的としたクラスです。基本事項の確認から受験対策まで、希望に合わせて指導いたします。日本史・世界史が苦手な方も、好きな方も大歓迎です。

～開講可能クラスの紹介～

『確率・統計の考え方』

対象：中学生以上 講師：浅野直樹

一般にデータから価値を汲み取るうとする際には唯一の正解というものはありません。確率・統計に騙されず、正しく考えるための思考法の訓練を共にすることができればと思います。

『文献調査入門』

対象：中学生以上 講師：浅野直樹

興味のある事柄について文献を読み、レポートや論文をまとめます。一つの学期に一つのそれが完成できるようお手伝いします。

『漢文入門』（9月から開講予定）

対象：一般 講師：木村亮太

漢文訓読の基礎を学ぶクラスです。詩、伝記、議論文など、様々な文体に挑戦しながら、訓読の方法をしっかり身につけていきましょう。

『ロシア語講読』 対象：一般 講師：山下大吾

プーシキンなど19世紀ロシアの古典作家の作品を中心に、受講生と相談の上テキストを選択します。初めてロシア語を学ばれる、あるいは再挑戦される方々を対象にした入門コースも開設予定です。

春学期・時間割（予定）

*他にもご希望のクラスがございましたら、お気軽にお問い合わせ下さい。

		4:20-5:20	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
月	英語一般 (14:10～15:30)*1,2	つくる*3 (4:30～6:00 隔週)	*4	高校ことば イタリア語講読	高校英語 A ラテン語入門
火		しぜん A*5 かいが A*5 (3:50～5:20 隔週) かず1～2年	ことば3～4年 A かず5年 A	中学ことば ギリシャ語入門	中学英語 ギリシャ語講読 A
水	フランス語入門 (10:40～12:00)*1,2	ことば1～2年 かず4年 A	ことば3～4年 B かず4年 B かず5年 B	かず6年 中3 英語 古文講読(高・一般)	中学数学 歴史入門(高校) ラテン語初級講読 A
木		しぜん B*5 かいが B*5 (3:50～5:20 隔週) ことば5～6年 A	ウェブプログラミング入門 (5:10～6:30 隔週)*2	高校英語 B	高校数学 ラテン語初級文法
金		ことば3～4年 C ことば5～6年 B	かず3年	ロボット工作*5 ユークリッド幾何*5 ギリシャ語講読 B	ラテン語初級講読 B ラテン語中級講読

- *1 4:20より前の時間帯のクラスは、1) 9:10～10:30、2) 10:40～12:00、3) 12:40～2:00、4) 2:10～3:30 がございます。
- *2 一般(大人)クラスは、受講生と講師の相互の都合に合わせた時間帯となるケースがございます。
- *3 「つくる」は、小学生対象の工作教室です。
- *4 漢文入門は秋学期(9月)からの開講となります。
- *5 「しぜん」と「かいが」、また「ロボット工作」と「ユークリッド幾何」の組合せは隔週となります。(両方受講可能)

● 3/5 (土) 学びの夕べ (中高生～大人対象)

- 第1部 13:30-15:00 「研究調査の夕べ—調べる・まとめる・発表する」
(担当：浅野直樹)
- 第2部 15:30-17:00 「経済学の夕べ—日本経済のゆくえを考える」
(担当：百木 漠)

● 3/12 (土) 古典の夕べ (一般対象)

- ギリシャ語の夕べ 16:30-18:00
「Οὐκ ἐκ χρημάτων ἀρετὴ γίγνεται, ἀλλ' ἐξ ἀρετῆς χρήματα—ことばが人を裏切るとき」(担当：広川直幸)
- ラテン語の夕べ 18:30-20:00
「ケーベル先生と古典—“You must read Latin at least.”の意味」(担当：山下大吾)

● 静物画—モチーフを「演出」してみよう

静物画は初めてではありませんが、これは「いかに描くか」をいつもより意識した挑戦です。モチーフを「役者」に例え、描き手には映画やドラマの監督・演出家になってもらいます。舞台は教室の外です。誰を役者にし、何処に立たせるのか。グッと寄ってアップを撮るのか、引いて撮るのか。見る角度は…。そうした視点の工夫により、絵の可能性は無限に広がります。また、場面を考える試行錯誤の時間は、「役者」たちへの愛着を抱かせることでしょう。

課題の枠を超えた空想も登場しましたが、その日、園庭で感じた空気に包まれた演出がなされており、独自の解釈できちんと課題に向き合ってくれたことが分かります。絵は心のままに。それが何よりです。



空を仰ぐ、柿に賀茂茄子、いちじく。気持ちが空へ溶け出してゆくよう。(M作)

いちじくと柿、丘の上。あの雲を眺めているのかな？(S作)



ブランコの上、肩を寄せ合ういちじくは、何を想うのでしょうか。(H作)

遊具の馬の背に乗るのは、陶器の水差しと柿。この日は馬のみ描き切ったところでクラス修了。その後、日が経ってしまいました。小鳥を描いて絵を完成させました。終着点が自由であることも、絵の良さ。(S作)



園庭に連れてきたバナナの木。上から下から眺めると、空に浮かぶ三日月は、バナナでした。バナナの木を照らす月に、バナナ型の影、という絵。(Y作)

「よし、僕も」とバナナの木を、園庭の木々と一緒に並べて描いたK君の絵の中には「バナナくん」の文字が。



園庭で見つけた葉っぱたちが、パーティーにやってきた場面。台詞つきです。繋がった笹の葉は一つの家族です。「ゆうやけくん」が、後ろから見守ります。(上/I作)

みかんやモミジの葉といったモチーフを、何と、鳥の親子に変身させてしまいました！
こういう発想もあるんですね。(右/I作)



前のめりになる時間。黄昏れる時間。どちらも大切であり、絵にとって必要なのです。夕焼け空に去ってゆくケロロ軍曹(左/I作)と、月夜に歌う、星のカービー(右/M作)。

● 鉛筆で描いてみよう

鉛筆だけで、どんなことが出来るか、みんなに考えてもらった日があります。デッサンは、何のためにあるのか、という話をしたり、部屋を暗くして、点光源で照らしたオブジェの「かげ」を観察したりしました。影(陰)については、特に低学年にとって、頭で理解できても、あらわすとすると難しさを伴います。ただ、デッサンに少なからず興味をもつ生徒がいたので、ものを捉えるときの、ひとつの観点として、一度みなさんに紹介しておきたいと思ったのです。絵に、かげがついていなければならない「のではない」と、最後に強調しておきました。

一方、「濃淡」や「タッチ」に変化をつけるという考え方については理解しやすいようで、それぞれに工夫が見られました。描いたのは、自分の顔や手、その他のものです。ここでは紙面の都合上、自画像を中心に作品の一部を紹介します。



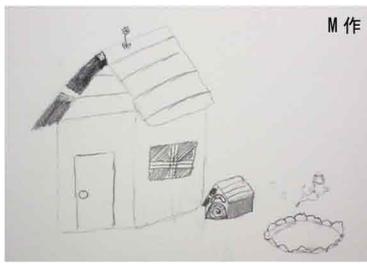
Y 作



H 作



Sa 作



M 作

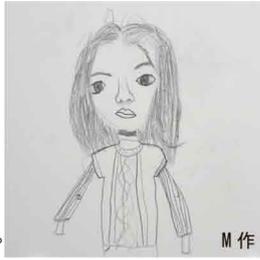


U 作

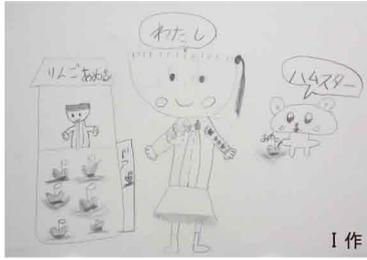


Su 作

目鼻口の形やまつげの一本まで、つぶさに観察した様子が伝わってきて、どの自画像も胸を打ちます。質感表現にも工夫が見られます。



M 作



I 作

かけを意識した作品も。なるほど…と感心しながら技法書にあった小屋の絵を自分流にアレンジしたり、教室にあった林檎を敢えて凝視せず、空想でデッサンに挑んだり。Iちゃんも、林檎絵に影をつけてみました。

●「画材の大実験」から

貼り絵（コラージュ）へ

秋学期末から冬学期にかけて、「画材の大実験」と称した「模様の紙」作りを行いました。用意したのは薄口・厚口画用紙、水彩紙・和紙、水墨画用紙などの紙。

そこに絵の具、色鉛筆、パステルなど、様々な画材を用いた、大胆な実験が行われました。何かを描こうと構えず、ただ白い紙を無心に彩ってゆく作業の中では、画材の感触や、色の効果がより鮮明に浮かび上がってきます。



重なる色鉛筆の波紋、



水彩絵の具の水玉模様



刷毛でグラデーション



パステルをごしごし



筆を叩いてパパッ！



スプレーでシュッ！



和紙を浸す染め物職人



Iちゃん秘密のレシピ。



材料が沢山出来ました。そうです。これらを用いて貼り絵をするのです。春学期にした「マーブリング」の紙も材料になります。ルールは「紙に貼り付けられるものを貼る」ということただ一つ。その他の素材や描画との組み合わせも勿論OKです。

折り紙や、美術展のカラフルなチラシや、毛糸玉を教室にずらりと並べ、みなさんのアイデアと工夫を応援しました。

実験の結果、足の踏み場が無いほどに。1回のクラスで10枚以上描く人も。



サイを貼り絵にするぞ



この部分を使おうと



下絵どおりにピッタリ



僕は目玉のおやじだ



家から端布を持ってきたよ



よし、毛糸も貼っていくぞ



この花びら、何色がいいかな



仕上げは一気に着彩だ



一つ完成！次は何にしようかな



「丹念」という言葉がぴったりくる「ルリちゃん」(左/M作)と海の魚たち(右/K作成中)。どれほど時間をかけたでしょう。作品に命が宿ります。K君作品は即興生も混じり、賑やかです。



マーブリング模様の中から、不思議な生き物の形を次々と見出しました。別の惑星の出来事を見ているよう。(右/SY)



弾けるような勢いを持つ目玉の親父！背景にはチラシの黒っぽい色を使用(右/KI作)



半紙の透明感、破いた質感が、鯉に瑞々しさと温かさを同時に与えています。最後に置いた絵の具が鯉の体に染みて、一体感も生まれました！感動的仕上げ。(左/U作)

紙芝居「うさぎのおやこ」は何と10ページ目へと突入。下は、みんなでデパートに出かける場面。チラシを使った表現が生き生きして面白いです！(右下/I作)



Sちゃんも勢いよく制作中。ワンピースも貼りました。花びらが鮮やかです！(左)

可愛さなら負けません。見て下さい。このおしゃれなパンダのソックスと愛らしいポーズ！(下/T作)



こんなサイを想像できますか？ポップでキュートで優しげで、しかも、神々しい！キラキラや色使いのバランスも絶妙です。(左/M作)



Hちゃんは空想の花を制作中。花びらをマーブリングで統一して、不思議な感じを演出していますね。花の全貌はまだ、秘密にしておきましょう！(左)



貼り絵と並行して、何人かが「版画」制作に取り組みました。小学校で体験したばかりらしく、かいがクラスでも挑戦したいという声の中・高学年から上がったのです。低学年の何人かも「してみたい！」と乗ってきました。こうした積極的な気持ちは大歓迎です。

そこで、版木、ゴム版、消しゴムなどを用意し、各々が無理のない範囲での版画(または消しゴムハンコ作り)を楽しみました。

彫っている最中は「う～ん、難しいなあ」「手間がかかるなあ」時折そんな言葉も溢れましたが、掘り終わったとたん「先生！インクインク！」「紙下



彫れてる？見守る6年M君

ハンコが彫れたぞ

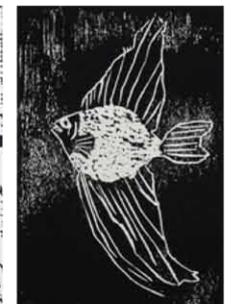
ほくも彫るぞ

さい！」と再び勢いを取り戻します。そして最後に刷り上がったときの達成感により、全てが報われます。乗り越えてこそその喜びです。消しゴムハンコに挑戦したみなさんも、真剣そのものでした。普段、カッターは殆ど使わないというSちゃんが、何十分もかけて消しゴムを四つ葉のクローバーに彫り終え「は～、緊張した～」と言いながら見せた、爽やかな笑顔が心に残りました。版画には、またいつかみんなで、じっくり取り組みましょう。

「大実験」に始まったこの貼り絵のプロセスには、描くことの中にある即興的な感覚、意図して丹念に作り込む感覚の両方が織り交ぜられています。どちらもが、絵画の良さであり、楽しさであることを、クラスみんなに感じてもらったのです。まだ制作中の作品もありますが、どれも個性の光る濃密な作品ばかりです。

貼り絵の後は、最後の自由制作に取り組みます。一年間、駆け抜けてきた仲間達の軌跡を、「かいがクラス作品展(3/22～29の平日開催予定です)」にてご覧頂けたら幸いです！

(文責 梁川健哲)



「漢字が彫れたのが嬉しい」とI君。木版の刷りムラで、雰囲気出てます(左)。M君のゴム版画にあこがれたのでしょうか。彫刻刀の練習を積んで、鳥の絵完成(SY作/左から2番目)。そして右2つがM君作。木版のエンゼルフィッシュの鱗、うまくいきました！

● 「しぜんクラス箱庭展」を終えて

秋学期までの取り組み「箱庭づくり」の成果発表として開催した「箱庭展」には、初日から園の全クラスの先生方が園児を引率して見に来て下さいました。（この取り組みについては、ホームページ内「山びこ通信バックナンバー」春・秋学期号にてご覧頂けます。）その後、一週間の会期中、毎日のように通ってくれた園児もいたほどで、一つ一つ指さして興味津々に訊ねては感心していました。特に、U君（6年）の、水に池が滴る装置をはじめ、T君やSY君の水やり装置は人気で、私が実演するたびに「わあ・・・！」と感激していました。海辺の世界に、生きものの住む庭、カタツムリが遊ぶ庭、おもちゃ箱のような部屋……。クラスのみんなが育て上げてきたユニークな庭たちは、紅葉を積もらせたり、木漏れ日を浴びたりして、みんな嬉しそうでした。何度も水漏れと戦ったFY君の池も、誇らしげに水を湛えていました。

ご来場下さいました、園児の皆さん、保護者の皆様、先生方、本当に有り難うございました！

● ひみつの森の、ひみつ基地

冬学期は、両クラスとも、フィールド・ワークを中心に展開しています。みんなで話し合っ決めて「ひみつ基地作り」、以前からずっと約束していた「バームクーヘン作り」をすることが、主な目標です。基地の傍にはアスレチックも作ります。まずは基地に相応しい場所探しからです。そうして探検しながら、道々焚き火に使う薪を拾ったり、焼く時の芯に使う竹を探したり、バームクーヘン作りの準備も進めてゆきます。

両クラスとも、それぞれ別の、「ひみつの広場」を拠点に定めると、先に、アスレチック作りから始めました。ロープを使った「綱渡り」や「ブランコ」です。

今日感じたことや、秘密基地のアイデアを、探検ファイルに書き留めます。後ろに見えるロープが「綱渡り」。膝がガクガクして楽しかったですね！



あ、けもののおいがする！

「鹿かな、イノシシかな」「ヤンバルクイナかもよ」

道々、思いがけない発見が、いつも待っていて、様々な推論が交わされます。

試作ブランコ完成！真っ暗の中で列を作り、代わる代わる何周もこぎました。



「やった！うまくいった！」



ランタンの灯りのもと、ひみつの計画をひそひそと。

『引き解け』には注意が必要よ」「これは『八の字結び』よ・・・」と、Nちゃんがロープワークのレチャーをみんなにしてくれました。

一森の中の「不自然」なもの

秋学期のある日、山の斜面の竹林へ、工作に使うための竹を採りに行ったときのこと。「あれ？こんな落ちてた・・・」一人があるものを拾って、持ってきました。すると、他のみんなも次々に、「ここにもあった！」

「こんなのもあったよ！」と、探しては運んできてくれました。積み上げられたものは、「プラスチック製品、空き缶、発泡スチロール、陶器やガラスのかけらなど。すなわち、ごみです。

それが「よいことだから」と殊更に意識して行っているというよりは、ごく「しぜん」な心の働きによって動いているように、私の目には映りました。みんなの中に備わったこのような気持ちと能動的な行為に、深く感動しました。「誇りに思っ欲しい！」その時の気持ちを、冬学期の冒頭でみんなに伝えました。そして、これからは森へでかけるとき、必ずゴミ袋を携えていくことをみんなと約束したのです。

以来、以前に増して「不自然なもの」を捉えるアンテナの感度は上がり、少し無理しなければ届かないようなところにあるものまで、茂みをかき分けて拾ってきてくれます。まるで宝物でも拾い集めるように、目をきらきらさせながら。

その気持ちが、みなさんの、「当たり前」「しぜんな心」として、いつまでも変わらずにあり続けてくれることを切に願っています。

さて、ひみつ基地とアスレチックの続きをご覧下さい。

12月は、クラスが終わりの時間に近づくと、森の中はすっかりと暗くなります。少しゾクゾクとする中、「妖怪っているのかな・・・」「きっと今、どこかから見てるで」「イノシシがきたら、どうする？」などと話しながら、ランタンを手にして一列に帰路につく姿を見ていると、みんなの心が一つになっているように感じます。

闇を抜けて園庭に駆け出すみんな。「あ、京都タワーや！」冬の澄んだ空気に眩しくまたたく街の灯り。じんわりと押し寄せてくる安堵感。冬の探検でしか得られない感覚が、そこにあります。



園庭から望む京都の街



名誉のため補足致しますが、このお山も森も、ごみに溢れかえっている訳では決してなく、「誰か」がいつも手を掛けて守っている痕跡が、ここそこにあり、郷土愛に包まれているのを感じます。

一方で、心ない何者かにより捨てられたと思われるゴミが時々目に留まるのも事実です。空き缶や瓶類などを見るとその殆どが、古い時代、おそらくは、今ほどにゴミの分別回収やリサイクルが普及していなかった時のものばかりであることに気づきます。

「信じがたいけれど、そんな時代もあったんだね」そんな風に昔を懐かしみ、ゴミへの意識が随分と進化した今の時代を喜び、清々しい気持ちで自分たちの里山を守る「誰か」に、私たちもなりましよう！探検に行くたびに、森もきれいになるなんて、一石二鳥！



NY君が見つけた木の塊をロープの先にくくって投げると成功!



Bクラスのブランコは、漕ぐ度に、枝の先がバサッバサッと大きく揺れました。「やめてよ〜!」と叫んでいるのかな。「わーい、楽しいな!」と喜んでいるのかな。みんなに訊ねてみました。



Aクラスはかなり高い枝にロープをかけました。なかなか苦労しました!



「えいっ! あれ?」ロープを投げて何度もジャンプ。「なるほど、やっと掛けられた!」「やほー!」



「あの実、とりたいたいな...」「それっ! これで届く?」 若木に挑む、綱引き勝負! 「めがまわる〜!」「よいしょ!!」



大きな弓なりの枝! やったぞM君。屋根をささえる材料に使うね。宙に浮かぶ、根っこのソファーよ! 立ち漕ぎで、ゆったり振れます。



結び方、マスターしたぞ! 重そうだね、手伝うよ。

池を掘るの? 手伝うよ。



Aクラスは、段違いになった地形を生かし、斜面を背にして張り出した屋根を作ります。FY工法のイメージを、みんなが共有しています。左は屋根を斜面の上から見たところです。

どんどん枝を結んでいきます。

広場の更にも奥に、U君がすごいものを発見しました。谷の上に浮かぶ倒木のベンチ。見渡せば、凄まじい迫力。そして、絶景です。



たくさんの驚きや喜び、知恵を与えてくれる、ひみつの森は、いつでも君たちのことを待っています。また、探検にでかけましょう!



この丸太、どうにか運べないかな。

(文責 梁川健哲)

冬学期は、『暗唱』、『カルタ作り』、そして『はれときどきぶた』(矢玉四郎作、岩崎書店)を読みました。

カルタ作りというのは、辞書で単語の意味を調べて、それを一枚ずつカルタにしていく作業のことです。秋学期に「あ行」(青菜・いちじく・うっとり・えくぼ・オアシス)から始めて、「わ」「を」「ん」まで、一つずつ手回ひまかけて完成させました。「を」「ん」は最初省くつもりでしたが、やはり一年生の好奇心にかかると「それも書きたい!」という展開になりました。辞書を引くこと約五十回、五十音順が頭に入ってくるとともに、引き方もだいぶ慣れてきたように思います。

また本読みでは、生徒たちに朗読してもらっています。先の『オズの魔法使い』の時には私が読んでいたので、生徒たちは「待ってました!」とばかりに張り切っています。一節ずつ心をこめて読んでくれるので、その都度驚かされます。このたび了読したので、このクラスでは二冊目の達成感を味わったこととなります。

暗唱では、昔ながらの数え歌や、落語の台詞に挑戦してきました。4月に「桃栗三年」や「寿限無」から始まって、今ではレパートリーが7つまで増えました。その中から一つ「ん廻し」というものを紹介しますと、それは次のようなものです。

「先年^{しんせんえん}神泉苑の門前の薬店、玄関番人間半面半身、金看板^{こんばんまんきんたん}銀看板、金看板根本万金丹、
銀看板^{こんげんほんごんたん}根元反魂丹、瓢箪^{きょうたん}看板灸点

これは「ん」の付く言葉を言うたびに田楽豆腐が食べられるという、落語『田楽喰い』に出てくる台詞です。一目ぎょっとする文章ですが、リズムで覚えると大変面白いものです。生徒たちは今では、ある時はソロで、ある時は合唱で、またある時は黒板に書いて、得意になって発表してくれます。中には学校の休み時間でも言い合いっこをして覚えてくる生徒も現れ、その意欲はたまげたものです。この時期覚えた暗唱の「音色」は一生忘れることがないだけに、「完璧」にやり遂げたというその思い出は、思い出すごとに大きな自信となることは間違いありません。

ところで、この「ん廻し」の「ん」の数を生徒たちと一緒に数えたところ、43個もありました。そこで自分たちでも「ん廻し」に挑戦してみることを提案したところ、さっそく一人が辞書を使うことを考え出し、とうとう辞書引き大会になりました。

最初は「ん」が2つのものしか見つからなかったのですが、3つのものが見つかり出すと、それでないと満足しないという顔つきになってきました。「じゅうみんけんうんどう」「ぜんぼうこうえんふん」など、こちら予想だにできなかったすごい単語がいくつも飛び出しました。次は4つの「ん」の単語は見つかるだろうか…? とハラハラドキドキしながらできるだけ長い言葉を探して辞書とにらめっこをし、「ふじさんろくこくりつこうえん…ああ～、これだけ長くても2個しかない…!」と悔しそうなうめき声を上げます。残念ながら「四つ葉の『ん』」は最後まで見つからなかったのですが、見つけた単語で合計すると43個となり、「やったー!」という喝采が上がりました。

このようなやり取りは、きっかけはあるにせよ、最後まで私がそのやり方を注文したわけではなく、あとはどんどん生徒たちの方から出てきた展開です。そのように、生徒たちとのやり取りにどれだけ付き合えるかということが、クラスで一番大事にしていることです。

また授業以外にも、家で俳句を作ってきてくれた人にはそれを添削して返しています。色画用紙を数枚ホッチキスで留めた句帳を渡しているのですが、今ではもう三冊目、四冊目となってきています。こうしたキャッチボールを続けていくことが、自然と言葉の花を咲かせることにつながっているのだと確信しています。



左は、辞書作りの延長で配った『なんでも辞典』です。俳句帳もこれと同じように、色紙をホッチキスで留めたものを用意しています。はなはだ簡便ではありますが、こうした「新しい紙」を渡すと、生徒たちはさっそく「何書いて来ようかなあ!」と喜んで持ち帰ってくれます。それがとてもいとおしく感じられます。これらの紙に書き溜めてくれた言葉は、添削して返した後、私の方でもタイプしてパソコンに保存し、また活字にして生徒たちにフィードバックしています。

さて、なんでも辞典の取り組みでは、Tちゃんが家で「プ」のページを調べてきてくれました。たとえば、「ブルー：1 青い色。ブルーのシャツ。2 ゆううつな。ブルーな気分。Blue」とありました。辞書に載っていた英語にも興味があるようで、「ブルドッグ：イギリスでつくられた犬のひんしゅ。とくちょうのあるかおつきをしている。Bulldog」など、他にもたくさん調べてきてくれました。こうした言葉のやり取りには、まるで時間の止まる思いがします。

(文責 福西亮馬)

毎回、クラスの最後には本を読んでいます、いろいろな地域の昔話、神話を多く読んでいます。「黄泉の国」の話がとりわけ K くんを心をとらえたようでした。春秋とつづけてきた俳句づくりも、みんな腕をあげました。来年も元気に「ことば」を楽しんでほしいです！

はしるとね	風がいっぱい	ふいている	H ちゃん
ゆう日はね	町の光と	おんなじだ	K くん
ぶらんこで	町のふうけい	見わたすと	
	そろそろ夜に	なってきたぞい	T くん(57577です)
雪ふって	つもったあとに	きらきらと	M ちゃん

(俳句は、「ことばの発表会」の際に、みんなのまえて披露する予定です)。

(文責 小林哲也)

『ことば』 3年生(水曜2限) 担当 上尾真道

冬学期、「ことば3年」のクラスのテーマは、「自分のことばで意見を言う」&「相手の意見を丁寧に聞く」の二つです。これを実現するために、今学期は、主にディベートやディスカッションを行ってきました。そもそも、このクラスは人数も多く、普段からもそれぞれが活発に意見を言いあう場面が頻繁に見られたのですが、このエネルギーを、ただ気晴らしや楽しみとして発散するだけではなく、より論理的で建設的なコミュニケーションのために使うことを経験してもらおうという狙いもあります。

第一のテーマ「自分のことばで意見を言う」ことについてですが、しばしば指摘されるように、日本の風土に由来するかどうかはさておき、子供たちは、自分の意見を人前で言うことに恥ずかしさを感じる傾向があります。第一のステップとして、自分の意見を表現することにおいて楽しみを見つけて欲しい、あるいは自信を持って欲しいと考えて、クラスでは、子供たちに積極的な発言を促し、そのひとつひとつを互いに尊重するようにと教えています。また、そのためには、もちろん、第二のテーマ「相手の意見を丁寧に聞く」ことが重要となります。他人の意見の重みを理解し、またそうしながら、どんな意見でも聞きあう雰囲気をつくるからこそ、自分の意見についても正々堂々と表に出すことができるようになるでしょう。「話し合い」ということは、第一の水準においては、合理性を追求する言葉のやり取りに見えますが、その背景では、人間同士の認め合いの関係の構築にもつながっています。

クラスで行ったディベートやディスカッションでは、これまで例えば「犬と猫、どちらがペットとして良いか」や「学校の授業で一番大事だと思う教科は何か」などの議題のもとで、互いの意見について反駁したり、または相談により意見をまとめたりといったことを行いました。誰かの考えとつなぎ合わされることで、最初は自分だけのものだったひとつの考えがどんどんと展開していくことは、それだけでも十分に楽しいことだと思います。この楽しみとともに、子供たちがお互いに認め合う術を身につけてくれればよいと思います。

(文責 上尾真道)

『ことば』 4~6年生(金曜1限) 担当 高木 彬

このクラスでは冬学期を通して本の朗読と物語の創作に取り組んできました。

本の朗読は、いわば準備運動です。良質な物語にふれ、そこから創作の手法を学ぶことはもちろん、自身が物語をつくる状態へ気分を移行させるためにも、これはうってつけの取り組みでした。毎回一章ずつ、時間にして15分ほど、クラスの初めに朗読しました。冬学期で読んでいたのは、斉藤洋『ぼくのおじさん』(偕成社、1993年)でした。この物語は、10年ものあいだ行方不明になっていた「おじさん」が、ある日ひょっこり「ぼく」の家へ帰ってくるところから始まります。帰ってきた「おじさん」は、なぜか頭にインドのターバンを巻いているし、そもそも初めて会う人だし、「ぼく」はなじめないものを感じてしまいます。

でもそこから、ヨガの術を教わったり、ある秘密を共有したりと、「ぼく」と「おじさん」は少しずつ仲良くなっています。物語が進むにつれて、じわじわとお互いの距離が縮まっていく様子が、ほほえましく、胸打たれます。AちゃんとHちゃんは、毎回この朗読の時間を楽しみにしてくれているようでした。この物語は、章のタイトルが少し珍しくて（たとえば、「いると出るのちがいと雑誌を読んで順番を待っているわけではないニューヨークのおまわりさん」など）、その章を最後まで読んでみないとタイトルの意味を理解できないような仕組みになっています。お二人はいつも、朗読の最後に章題を見返して、「なるほどー」と手を打っていました。「ぼく」と「おじさん」は力を合わせて最後にあることを成しとげますが、この本を一冊読み切った彼女たちも、大切なことを達成したように思います。

物語の創作では、前号の『山びこ通信』でお伝えした後に、Aちゃんが『女優になっちゃった！？』を、Hちゃんが『借りぐらしのアリエッティ』を、それぞれ完成させてくれました。Aちゃんの『女優になっちゃった！？』は、女優という夢に向かって進む女の子の物語です。明るく前向きな物語展開もさることながら、女優になるために生まれる葛藤や、女優ならではの特別な感情の機微を、繊細に描き出すAちゃんの筆力と努力も素晴らしいと感じました。またHちゃんの『借りぐらしのアリエッティ』は、同名のジブリ映画の世界観を借りた、彼女のオリジナル作品です。原作の設定を上手く活用しながら、それを独自の物語へと完成させる構成力は見事でした。場面と場面がきちんと因果関係で結ばれたストーリーは力強く、論理的に筋立てを構想する力を感じました。このクラスでは、このように、生徒さんそれぞれの得意とするところを褒めて見守ること、そして、文章を書く基本から物語に広がりや深みを与えるためのポイントまで、創作上のアドバイスを与えて励ますこと、この二点に徹してきました。

私がこの文章を書いている現在、Aちゃんは『魔女とカーニバル』を、Hちゃんはオリジナルの『魔女の宅急便』を、執筆しています。『魔女とカーニバル』は、ふとしたことがきっかけで魔法の世界に行くことになった女の子が、魔女になるために奮闘する物語です。以前の『Paris Ballet Diary』と同じく、複数篇に渡る長編作品になっています。Hちゃんの『魔女の宅急便』は、誰もが知るあの映画の続編で、キキが働くパン屋のおソノさんに赤ちゃんが生まれるところから始まります。誘拐された赤ちゃんを取り戻すためにキキが頑張ります。偶然にも、お二人とも「魔女」をテーマとしています。それぞれ独自に物語世界を創りながら、同時にお互いに影響を与え合えるのも、このクラスの良いところだと思います。

(文責 高木 彬)

『ことば』 5・6年生(木曜1限) 担当 福西亮馬

これは冬学期に入って久々に『推理クイズ』をした時の様子です。推理クイズというのは、「はい」か「いいえ」で答えられるような質問で出題者の意図する状況を言い当てるとい、連想ゲームです。山の学校ではかれこれ2年ほど前からはやり出し、中でもEちゃんが「今日は推理クイズないの？」と挨拶代わりに聞いてくるほど大のお気に入りです。

本当はそれをする前に、この日はEちゃんが家から持って来てくれた『百人一首』をするはずだったのですが、私がうっかり以下の問題の紙を配ってしまったのでした。それで「せっかくだから百人一首を…」と言いかけたのですが、「どっちもしたいけど推理クイズからしたい！」という声がEちゃんから真っ先に上がりました。それでみんなも「それがいい！」ということになりました。(ちなみに百人一首も次週には大盛り上がりでした。クラスでは今百人一首がブームになっています)。

ヨーロッパのある街に、「14番屋さん」という仕事がある。これは、夜になると持ち場で待機し、呼ばれればそこで何かをするのだが、呼ばれない日の方が多い。一体どんな仕事なのだろうか？

さて、生徒たちはこれに対し、一人20回ぐらいは質問したと思いますが、以下のようにだんだんと状況が絞れてきました。

「14という数字には足し算は関係がありますか」
「はい」
「かけ算は関係がありますか」
「いいえ」
「何月が忙しいですか」
「…」(「はい」「いいえ」では答えられないので沈黙)

「12月は忙しいですか」
「私の想像ですが、たぶん、はい」
「クリスマスは忙しいですか？」
「パーティーが多いという意味では、はい」
「クリスマスは関係ありますか？」
「ある意味関係がありますが、直接ではないです」

「その仕事は、日本にもありますか」
「私が知っている限りでは、いいえ。向こうの文化や習慣だろうと思います」
「私たちはそれを知っていますか」
「知らないかもしれません。ただ以前 H 君には算数の時間に話したことがあります」
(周りから「ほら思い出して！」と詰め寄せられ「えー！」となる H 君。ノートを調べ出す)
「お酒を注いだり、お客さんをもてなしたりしますか」
「いいえ」
「それは何かのサービスですか」
「はい。どんなサービスでしょうか？」
「お酒は飲みますか」
「飲んでも飲まなくてもいいです」
「食べ物関係ありますか」
「直接の関係ではないですが、はい」
「その場所はレストランですか」
「はい！」
「料理を運ぶ仕事ですか」
「いいえ」

「その人はレストランの店員ですか」
「いいえ、雇われた外部の人です」
「配達屋さんですか」
「いいえ」
「演奏はしますか」
「いいえ」
「お客さんを笑わせたりしますか」
「いいえ。そうすることは義務ではないです」
「どんな人でもできる仕事ですか」
「おそらく、はい」
「子どもでも？」
「やろうと思えば、できると思います」
「立って仕事をしていますか」
「いいえ」
「座って仕事をしますか」
「はい、ほとんど座っています」
「何もしなくても、お金がもらえますか？」
「はい、座る以外は」

(解答は 28 ページ)

もちろん上記のようにスムーズに至ったのではなく、紆余曲折を経てということですが、途中何度も「もう無理！」「お手上げ！」という状況に陥ったのですが、「じゃあ、今日はここまでにして次は百人一首をしようか…」と私が切り上げようとするものなら、たちまち激しい抵抗に遭ってしまいました。「だって今日答えられへんかったら、『一生』分からずじまいなんやろ？ そんなことは『絶対に』いや！」と。

そしてとうとう、まる 1 時間みんなで考え込んだのでした。状況を絵に描いたり、それまでの質問を整理したり、とにかく思いついたことは片っ端から発言して、ありとあらゆる手を尽くした 1 時間でした。

結局、授業時間を過ぎてしまい、私が「あと 5 分だけ」と言ったその最後の 1 分間に、「分かった！」という手が上がりました。「13 は縁起が悪い数字ですか？」「はい！」「もし 14 番が 13 番でも同じ仕事はできますか？」「いいえ」「14 番屋さんは縁起が悪いことに関係がありますか？」「はい！」…さて、みなさんにはもう答がお分かりでしょうか？

このように生徒たちからは、毎回のように予想だにしない反応があります。それはとても講師冥利に尽きることであり、感慨深いです。

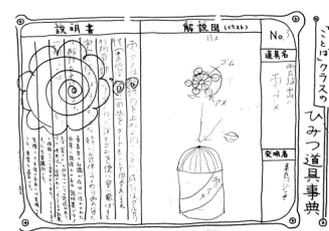
(文責 福西亮馬)

『ことば』 6 年生(火曜 2 限) 担当 高木 彬

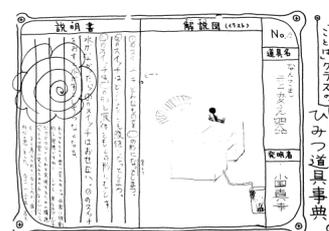
H 君と M 君には、こつこつと学びを積み重ねていく忍耐力があります。これはたいへんな資質であるとともに、これまでの彼ら自身の努力の賜物でもあると思います。そしてこの力は、これから先ずっと、あらゆる場面で、彼らの強みになり、彼らを支えていくことでしょう。

たとえば、朗読と筆写の取り組みは、昨年度から本をかえながら延々と続いています。今年度の秋学期の途中から冬学期にかけては、江戸川乱歩の『怪人二十面相』を取り上げました。H 君と M 君と私の 3 人で 1 ページずつ順に朗読し、その自分が朗読したページを書き取る、というスタイルも、当初からずっと変わりません。感心したのは、同じことを繰り返しているにもかかわらず、毎回ごとに、集中力が上がりつづけていることです。朗読をし、筆写する時間には、非常に厳粛なものがあります。私も意識して、筆写原稿をまとめて書籍の体裁に綴じて彼らにお返しするようにしています。これも、『オズの魔法使い』、『ガリバー旅行記』に続いて 3 度目で、彼らのモチベーションの一つとなっているようです。

また、このクラスではこれまで、ドラえものの「ひみつ道具」に倣って、自分たちオリジナルの「ひみつ道具」を構想し、その機能や構造を文章で説



H 君の「雲救出! 雲アメ」



M 君の「なんでも雲変え器」

明するという取り組みを、二週間に一度のペースで行なってきました。その、彼らが発明したたくさんの「ひみつ道具」を、今年度は年度末に一冊のオリジナルの事典にまとめようと思いついたのも、こうした彼らの日々の努力をなにかのかたちで残したいと考えたからです。この『山びこ通信』の文章を私が書いている現在、ちやくちやくと新しい道具が生み出されていますが、そのどれもが発想に富んでいて、彼らにしか作れない独創的なものになっています。M君とH君の姿勢に触発されて、隣で私も「ひみつ道具」を作っていますが、誇張でもなんでもなく、彼らの発想力にはぜんぜんおよびません。実際に制作してみると分かるのですが、いま世界にないものを新しく創り出す、ということは、想像以上に難しく、また想像以上に面白いことです。

いつだって「ことば」自体は既知のものですが（だからこそコミュニケーションやシンパシーの道具たりえるのですが）、その「ことば」は用い方によって未知のものも生み出すことができます。その面白さを知ることができれば、誰に強要されずとも自分自身の楽しみを原動力として、どこまでも「ことば」の世界を探求していくことができるでしょう。山の学校で得た「ことば」への自信を胸に、中学校でより広い世界へと羽ばたいてください。

(文責 高木 彬)

『かず』

1年、3年A・B、4年A、4～5年
(火1) (水1・水2) (火2) (金2)

担当 小林哲也

早いもので四月に各クラスがはじまって、もう1年が経とうとしています。冬学期の「かず」クラスでは、これまでやってきた取り組みを発展させるとともに、新たな問題やパズルに挑戦もしています。

1年生のクラスでは、冬学期は少し変わった形でたくさんの計算を行なっています。このクラスの生徒さんは、お家で九九を少し早めに覚え出しているのですが、山の教室では、足し算の形でかけ算への理解を深めてもらっています。たとえば、同じ数を繰り返し足して12になるような数を考えます。

$$\begin{array}{ll} 12 = 2 + 2 + 2 + 2 + 2 + 2 & 12 = 3 + 3 + 3 + 3 \\ 12 = 4 + 4 + 4 & 12 = 6 + 6 \end{array} \quad \text{という組み合わせ。}$$

おなじことを15、18、24、27といろいろな数でやってみます。足し算の組み合わせを考える中で、となえていた九九と「九九の意味」がつながるようで、ときおり「そうか!」と声をあげます。他にも計算は少し難しいところまで進んでは、また易しいところへも戻るといった形で、じっくりと頭に馴染ませるための取り組みをすすめています。計算と、今までのパズルの他には推理力が要求される「アルゴ」というゲームにもがんばって挑戦しています。生徒さんは、この1年でたくさん勉強して、大きくなったようです。

3年生、4年生のクラスでは、虫食い算、覆面算といった取り組みを新しく導入しています。御覧の方も是非挑戦してみてください。

- ・ □にあてはまる数字を入れます。
- ・ それぞれの文字が数字にかわります。

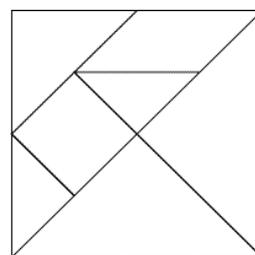
$$\begin{array}{r} 3 \square 3 \square \\ \times \quad 5 \\ \hline \square 6 6 6 5 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} I M O \\ \times \quad O \\ \hline K U U \end{array} \quad \text{* 同じ文字には、同じ数字が入ります。}$$

左の虫食い算は少し考えればわかると思いますが、右の覆面算はなかなか手ごわいものです。ポイントは繰り上がりに着目することと、たとえば1を入れたら、2を入れたら、あるいはたとえば9をいれたら、というふうには、色々トライして試してみます。クラスみんなが最後まで熱心にチャレンジしていたのが印象的でした。是非みなさんも挑戦してみてください。

3、4年生は、他に論理パズル、暗号クイズ、アルゴ、タングラムなど、多数の取り組みを行なっています。来年もどんどん難問にトライして、頭をやわらかくしてほしいと思います!

(文責 小林哲也)



(タングラム。7ピースが、ウサギになったり、キンギョになったり)

『かず』 2年生(水曜2限)

担当 和田 浩
福西亮馬

和田浩です。秋学期より引き続き、かず2年のクラスを担当させていただいております。

前回の山びこ通信において、かずの学びにおける大きな目標は、基礎力の養成とかずのセンスの養成であると申しあげました。そしてその目標に向けて、かず2年のクラスにおいて、子どもたちが計算ドリルとかずのパズルに取り組んでいる様子を紹介しました。

冬学期においても、こうしたクラスの方針に変更はありません。ただ、子どもたちの様子に少しずつ変化が生じてきたような気がします。また、子どもたち個々人の変化にとどまらず、学びの場自体の変化をも感じ取ることができます。そこで、以下ではこうした変化に着目し、前回とは異なる角度からかず2年のクラス風景を眺めてみたいと思います。

まずは、前半の計算ドリルの時間。秋学期と比較すると、子どもたちはスイスイと計算ドリルを解けるようになりました。秋学期には、計算ドリルの時間にちょっと退屈そうな表情をみせる子どももいましたが、最近はみな集中してドリルを解けるようになっており、後半のパズルの時間になってもなお計算ドリルを続行したがる子どもがいます。もしかしたら、計算ドリルを反復するという営みのうちに、子どもたちはこちよいリズムのようなものを感じられるようになったのかもしれませんが。

先日は、全員が計算ドリル2冊を終了したことを表彰するちょっとした式典がとり行なわれました。背筋をぴんと伸ばし、ちょっとかしこまった表情で表彰状を受け取る子どもたちからは、どこことなく威風が漂うようでした。

次に、後半のかずのパズルの時間。秋学期では、一人一人で行い組みパズルを中心に行いましたが、冬学期は、子どもたちが複数人で共に考えるゲームやパズルを頻繁に行なっています。例えば、先日は、目的地から目的地までもっとも早く移動できるルートを発見するゲームを行いました。その際、子どもたちを2人ないし3人のチームに分け、チーム毎にルートを探してもらいました。そうすると、子どもたちは協力して思考や発想を重ね、たくさんのルートを発見してくれました。たった2問しかなかったのに、あっという間に30分が過ぎてしまいました。

こうして共に学ぶという営みは、子どもたちにとって、おそらく極めて重要なことです。子どもたちは、共に学ぶことによって、一人では思いもよらなかった思考や発想に出会うことができ、また、他者と共同して作業に取り組む訓練を積むこともできます。そしてなにより、仲間たちと学びの過程を共有することは、子どもたちにとって、端的な喜びなのだと思います。実際に子どもたちを見ていると、一人でパズルに取り組む時と比べて、イキイキと課題に取り組んでいるように見えるのです。

子どもたちの学びに寄り添うことは当然ですが、それに加えて、子どもたちの成長を鋭敏に感じながら、共に学ぶ場の形成に向けて情熱を注ぐこと。これが私たちおとなにとっての課題であることを、日々痛感しております。

(文責 和田 浩)

『かず』 4年生 B(木曜2限)

担当 浅野直樹

前号の『山びこ通信』で予告していましたが、最近このクラスではモノポリーを取り入れています。家でもやったと報告してくれる生徒がいましたし、わざわざ香港版を手に入れて持ってきてくれた生徒まで現れました。そのことから判断すると、どのような活動をするにせよ本気で取り組むという目標は達成できているようです。

モノポリーについてここで少しだけ紹介しておきます。サイコロをふって盤上を駒が進むゲームなのですが、ごらくや人生ゲームのようなものかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、それらのゲームとは本質的に異なります。確かにサイコロの運にも左右されますが、家や土地を買うタイミングを考慮したり、他のプレイヤーと交渉したりするという戦略が大きくものをいいます。私の直感では実力が7、運が3くらいの割合です。

それぞれの土地には価格が設定されているので、序盤はそれを軸にして進行することになります。同じ色の土地を全部揃えるとそこから大きな収入を得ることができるので、その場合には交渉での土地の価格は跳ね上がります。とはいえ同じ色の土地を揃えるのにお金を使いすぎるとその土地に家を建てることができず、期待したほどの収入が得られません。そのあたりの駆け引きがこのゲームの醍醐味です。序盤は駒得を狙い、終盤は駒損になっても相手の玉を詰もうとする将棋と似ていなくもありません。土地の色の特徴、他のプレイヤーの状況、残り時間など、考慮すべき要因を挙げるときりがないほどです。

実は論理的に考えると最適な戦略は自ずと絞られてきます。逆に言うと、明らかにまずい戦略があります。ここにかずクラスで取り上げる理由があります。このクラスの生徒たちが、経験的に少しずつ上手な戦略を立てるようになってきたのを見て取れました。また、2桁や3桁の足し算は頻繁に行うので暗算の練習になりますし、図らずも香港版ではお金の単位が異なっていたので単位変換も要求されました。おまけに香港版では中国語か英語のどちらかを読まなければなりません。それでも経験的に中国語の意味を解説していた生徒がいたのには驚かされました。やはり楽しみながらだと大きな力が発揮できるようです。

(文責 浅野直樹)

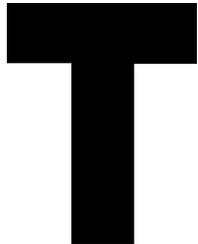
『かず』 5年生(水曜3限)

担当 岸本廣大

このクラスでは、いわゆる普通の算数の問題だけでなく、様々なパズルを用いて「かず」に取り組んでいます。秋学期までは、「数独」や「論理パズル」が主でしたが、冬学期からはそれまでとは一風変わった「図形」のパズルに挑戦しています。今回の山びこ通信では、その取り組みを紹介していきます。

主に取り組んでいるのは「Tパズル」というものです。有名なパズルですので、ご存知の方も多と思いますが、これは右のような4つのピースを組み合わせて、いろいろな形を作るパズルです。例えば、その名が示す通り、下の「T」のような形を作ることもできます。

クラスでは、全部で17の問題を出題しました。現在、そのうち14の問題を解くことに成功しています。一見難しそうに見えるこのパズルですが、コツを掴むと意外にサクサク解け、気持ちの良いパズルです。最初は子供さんもあれこれと悩んで、なかなか解くことができませんでした。そこで、私は「歪な形のピース(上の図でいうと、一番左のピース)」の使い方を考えるようにとアドバイスをしました。



このような図形のパズルは、「発想の転換」を培ってくれます。子供さんは最初「歪なピース」の「凹み」の部分をどのように埋めるかを必死に考えていました。しかし、多くの問題では、この「凹み」を外縁として上手く利用しなければなりません。つまり、一方的な思い込みを変える「発想の転換」が必要だったのです。それを意識させようと、私は先のようなアドバイスをを行いました。直接的なアドバイスではありませんでしたが、子供さんはしばらく考えた後で、いくつかの問題をあっという間に解いてしまいました。見事に「発想の転換」を成し遂げたのです。

「発想の転換」は算数や数学の問題を考える上で重要です。視覚的であるがゆえに、最初の印象に囚われがちな図形の問題では、これを意識しておく必要があるでしょう。ただし、これは図形の問題に限りません。計算問題や文章題でも、一見難しい問題が発想を転換することで簡単に解けてしまうことは多くあります。これは、秋学期の山びこ通信でも紹介した「狡猾な計算の仕方」にも通ずるところがあるでしょう。

そして、このような「発想の転換」は「かず」だけにとどまるものでもありません。その他の教科や学校生活、そして日常生活など様々な場所で求められ、効果を発揮するでしょう。また、子供さんの目に映る諸々の出来事を多角的に捉えさせてくれる「発想の転換」は、功利的な技術という側面以上に、生きる世界をより知的に楽しみ、面白く過ごさせてくれる最良のパートナーになってくれることでしょう。

(文責 岸本廣大)

『かず』 6年生 A(木曜2限)

担当 福西亮馬

このクラスでは、学校の進度に合わせた基礎の確認と、中学に上がるまでに興味を持ってほしい数学的なトピック、あわせて生徒が今一番興味を持っている内容に応じて授業を立てています。前号では数学的なトピックについてお伝えしましたので、今回は基礎の確認についてお話しします。

ある日の授業では、H君にホワイトボードの前に立ってもらい、一日先生をしてもらうことにしました。私が生徒になって、次のように質問しました。

「小数とは何ですか」と。

H君は説明の仕方を考えあぐねた後、数直線を描き出し、最終的にこう答えてくれました。「1を10個に(均等に)分けたうちの1つを0.1といい、これを10倍すると1になる」と。

「0.01とは何ですか」「100倍すると1になるもの」「なら、0.1と0.01の関係は何倍ですか?」「0.1を10個に分けたものが0.01なので、10倍」「じゃあ、0.01が10個で0.1、0.1が10個で1だったら、どうして10+10で20倍ではないのですか」「10個を10回数えるので、10×10で100倍」と。

次に私は「面積とは何ですか」と質問しました。H君は、「面積とは、『縦の長さ×横の長さ』」と答えてくれた後、5m×3mの長方形を例にとり説明してくれました。

ただ、H君が「これは公式で、単位はmだったらm²。cmだったらcm²」と付け加えて言ったので、さらに質問を続けました。「さっきの長方形が50cm×3mだったらどうなりますか。cm²それともm²?」「それは単位を揃えないといけないので、3mを300cmにして、50cm×300cm=15000cm²」「もしどうしてもm²で答えたい場合は?」「その時は、50cmを0.5mにして、0.5m×3m=1.5m²」と、ここで最初の小数の話にもつながりました。

「なら、1×3=3のように、縦1m×横3mで『縦1mのかけ算を省いて面積3m』」とするとなぜ間違いになるのですか」「それは、1mが何個ではなくて、『1m²』が何個あるかを数えなくてはいけないから」「なるほど。では、m²とは何ですか?」「……」

さて、ここからが本当の授業です。今H君が先生役ですが、私は質問しながらH君に「m²は単なる記号ではなくてm×mの意味がある」ということを理解してもらおうとして、次のように質問しました。

「1m²=□cm²を100cm²と答えると×されてしまいました。なぜですか?」

これは、ほとんどの小学生が一度は間違える問題です。実際、私がこれまで見てきた小学生たちの中で、これを最初から「10000」と答える生徒は一人もいませんでした。しばらくしてからまた聞くと、やはり「100」と言うケースがほとんどなのです。つまりほとんどの小学生が「1mは100cmだから」という理解で「何となく」その問題をやりすごし、×にされた後も「なぜ10000なのか」ということを心底理解する前に次の単元に移ってしまっているのです。

そこで、H君と私との問答も、かれこれ30分以上続いたと思います。私は「なぜ」ということを聞き続けました。そしてH君がとうとうホワイトボードに書くことに詰まって、「分からない」と言ってくれたところまで行き着きました。けれどもそこから、H君の真に素晴らしいところでした。

普通なら自分が「分からない」という事実を目の前にすると、それを隠そうとしたり、怒り出したりするものです。しかしH君は私の投げた質問に悩みながらも懸命に説明を返し続けてくれました。そのおかげで、H君は分かっている事柄を一つ一つ思い出し、「正しい理由」を組み立てることができたのでした。つまり、1m²は100cm×100cmであり、1m²を100cm²と見なすことは、先の1m×3mの面積を単に3mと答えるようなものだ、ということに気付いてくれたのでした。

昔からよく「分かるということは、分からないということが分かることだ」とも、「人にそれを教えることができた時、ようやく本当に理解したことになる」とも言われています。H君には最後にそのことを伝えたいと思い、残りの授業も大事にしたいです。中学生に上がってもかわらずに応援しています。

(文責 福西亮馬)

『かず』 6年生 B(金曜2限)

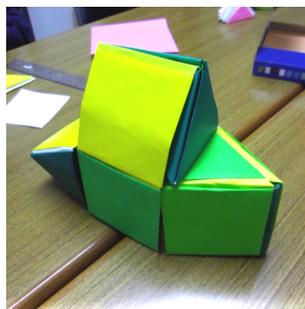
担当 高木 彬

前号ではドリルの取り組みについて重点的にお伝えしましたので、今回は、授業の後半に隔週交替で行なっている「パズル」と「折り紙」のことについてお知らせしたいと思います。前半のドリルは、強いていえば論理的に「かず」へとアプローチするものですが、後半の「パズル」や「折り紙」は、どちらかというとその思考の土台を固め、また幾何学的なセンスを養うものです。

「パズル」は毎時間、「まちがい探し」「迷路」「マッチ棒パズル」の3点セットで取り組んできました。「まちがい探し」と「迷路」は、どちらも思考するための体力と集中力を鍛えるためのものです。最近ではまちがいが10個(ときには20個!)以上ある問題でも、粘り強く、かつ時間内に、解けるようになりました。こうした成長は、「マッチ棒パズル」でも顕著に見受けられます。初めのうちは、「金魚」や「ちりとり」といった具体的なモチーフや、ごく単純な図形が多かったのですが、最近では、マッチ棒を何十本も使った抽象的で複雑な図形でも、無理なく解けるようになってきています。この1年間の、彼らの幾何学的感性のたしかな成長が実感できます。最近うれしかったのは、M君が自分でパズルの本を借りて、休み時間にもマッチ棒パズルにチャレンジしてくれていたことです。

「折り紙」も同じで、最初のうち手が慣れるまでの数回、ゾウやカブトムシなどの具体的なものを折った後に、六面体や八面体などの幾何学的立体を作るようになりました。冬学期には、折り紙で作った正方形や三角形の板を部品にした立体の作成に進む生徒さんも出てきました。いわば部品を自分で作れるブロックのようなもので、その点では「ひねもす」に似ています。違いは、「ひねもす」が「線」の造形であるのに対して、こちらは「面」の造形だということです。

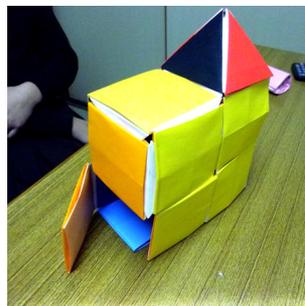
「パズル」や「折り紙」によって実際に手を動かしながら幾何学を体得した経験は、かならず彼らの将来につながると信じています。中学校でも自信をもって学びつづけて下さい！



M君の「太陽の塔」(部分)



Mちゃんの美しい六面体



Aちゃんの扉と屋根つきの建物 と、底面が三角形の塔



(文責 高木 彬)

『プレ英語』 6年生(火曜3限・全6回) 担当 岸本廣大

このクラスは2月から開講され、この原稿を書いている段階では、まだ一度しかクラスは行われていません。しかし、その一度のクラスで3名の生徒さんのやる気をひしと感ずることができました。計6回、通常の半分しか期間はありますが、その分、濃い内容のクラスにしていくつもりです。

さて、この「プレ英語」というクラスについての私なりの考えを、この山びこ通信では書かせていただきます。プレ英語とは“Preparation for English”の訳とでもなるのでしょうか。すなわち「英語の準備」です。特に、来年度中学生になって初めて英語に触れる生徒さんが安心して英語を学べるように、基礎中の基礎を培っていくことを目的としています。

クラスの最初に、生徒さんに英語のイメージを尋ねてみました。皆一様に、「外国の言葉」、「世界で通じる」という側面を挙げてくれました。全くもってその通りです。しかし、英語の勉強に際して、単なる外国語の習得や世界を知るという面にだけ気をとられるのはもったいないことです。というのも、英語を学ぶことで、私たち自身が語る日本語も見つめ直すことができるからです。使用する文字、単語、文法。英語はあらゆる面で、日本語と違ってはいますが、二つとも同じ「ことば」です。その違いを通して、改めて日本語の構成や特徴に気づくことが出来るはずで。そうした相対化を経てこそ、英語というもの、そしてそれを話す人々やそれを基礎とする文化への理解も深まるのではないのでしょうか。まだ頭が柔らかい生徒さんだからこそ、英語の学習を通じて、もっと貪欲に様々なことを学んで欲しい。身勝手ではありますが、生徒さんには「ことば」の学習という幅広い意味で、たくさんの期待をかけています。

では具体的に、中学校の英語に向けて何を学んでいくのか。クラスでは、アルファベットの習得と英文の書き方を目標として学習を進めていきます。やはり重要なのは、アルファベットです。英語の何を学ぶにせよ、アルファベットが不完全では、どうにもなりません。まさに、英語という「家」の「礎石」たる項目です。これと付随して、「ローマ字」も復習してもらいます。英語の発音は簡単なものではありませんが、わかりやすい「基点」としてローマ字は優秀です。それらを習得した後、「自己紹介」というテーマで英文を実際に書いてもらうつもりです。まだ細かな文法はわからないでしょうが、そうした状態で直に英語を体験し、感覚を養ってもらおう。「プレ英語」だからこそできる取り組みでしょう。

まだ始まったばかりで、詳しいクラスの様子を伝えることができないのは残念です。しかし一方で、これから生徒さんがどのように英語と向き合っていくのか、私は期待で胸がいっぱいです。英語に関してはまだ卵の生徒さんたち。彼らが孵化した後、英語という空を怖がらないよう、丁寧にそして着実にこのクラスを展開させていくつもりです。

(文責 岸本廣大)

『中学・日本語の読み書き』（火曜3限） 担当 高木 彬

この作文クラスでは、秋学期の後半から冬学期にかけて、松岡正剛の『花鳥風月の科学』（淡交社、1994年）の第二章「道」を段落交替で朗読しながら、節の読了ごとに感想や意見などを書いてもらいました。担当させていただいて今年で3年目ですが、これまでは、毎年度の後半で長編小説（『銀河鉄道の夜』、『モモ』）を取り上げてきました。今年エッセイを選んだのは、まずは、より多様な文体に触れて欲しいという思いがあったからです。『花鳥風月の科学』は、けっして難解な学術的文章というわけではありませんが、一般向けの文化論として書かれており、これまで取り上げてきた小学生から読める物語文とは別種の文章です。しかしながら、ゆっくりとしたペースでも、それをかみ砕くように読んでいくことで、実際に自分が作文する際のさまざまな文章表現方法を学ぶことができます。とくに松岡正剛の文章は、書くことを作者自身が楽しんでいるかどうか、あるいは文章表現の豊かさという点では、ずば抜けています。このクラスの生徒さんたちに紹介すれば必ず興味を持ってくれると信じていましたが、やはり、読みはじめてすぐにA君は「この人の文章はおもしろい」と言ってくれました。またK君は、本文でときどき敬体（「一です」）と常体（「一だ」）が巧みに織り交ぜられていることに気づき、「こっちのほうが読みやすいな」と言って自分の作文にも取り入れてくれていました。

『花鳥風月の科学』を取り上げたもう一つの理由は、タイトルにも表れているとおり、この本が文系／理系という枠組みを取っ払って古今東西の知を縦横に駆けめぐっているところにあります。このクラスで読んだ「道」の章も、柿本人麻呂が詠んだ「八十（やそ）の衢（ちまた）」からアインシュタインの相対性理論の「光の道」まで、あらゆる「道」を行脚しながら、大きな議論の道筋が示されています。中学1年生の彼らへ、知の世界の面白さと広がりを知る恰好のイントロダクションを、との思いで、この本を選びました。もちろん内容は多岐に渡るので、彼らにとっては（私にとっても！）知らないことや分からないことだらけです。私后感心したのは、H君が、マーカー線や書き込みで本文をいっぱいにしなが、着実に読み進めてくれていたことです。彼をはじめとして、努力を惜しまない生徒さんたちの姿には、胸を打たれました。

こうした領域横断的な文章は、読む側にとっては、議論のフックやアプローチの間口が大きく開かれている文章だとも言えます。本文が、古代中国における「道」という概念の呪術的な成り立ちから、「辻」という漢字に込められた意味について言い及んだとき、（当の）K君が、京都の街は東西南北の四神（青龍、白虎、朱雀、玄武）によって護られているという話をしてくれました。「街」（＝「行」＋「圭」）が、占術の結果を記す土板（＝「圭」）のように整然と区画された十字形の道（＝「行」）によって構成された場所（出典：白川静『常用字解』）であるとすれば、私たちが住んでいるこの四神が来臨する「街」も、本質的に「道」の話題と繋がっているのかもしれませんが。このように、この本には、本文に言及されていない議論へと膨らむ種があちこちに散りばめられていますし、だからこそ、こうした議論ができる生徒さんたちとクラスの間を共有できたことが、私には特別で貴重な体験でした。

（文責 高木 彬）

『高校・日本語の読み書き』（月曜3限） 担当 和田 浩

このクラスは、高校2年生のNさんとの1対1の個別クラスです。Nさんの目標とするセンター試験を見据えて、ともに文章を読み、問題を解き、議論を重ねています。これまでのところ、現代文とりわけ評論を中心に対策を行なっています。

センター試験の評論の問題は、文章全体の構造さえ掴むことができれば、ひとまず多くの問題に正答することができます。ですので、Nさんには、全体の構造を意識しながら読む習慣を付けてもらいたいと考えています。そのため、私たちの議論はいつも、まずNさんに、読んだ文章について簡潔にその構造を説明してもらうことから始まります。その後、私があらためて問題文の論理構造を析出しますが、その際には、できる限り問題文の背後にある知の構造についても説明するように心がけております。

また、センター試験は選択式の問題であるため、解答には必ず根拠があるはずで、そこで、Nさんには、ある肢を選択し、他の肢を選択しなかった根拠を、必ず説明してもらうようにしています。その上で、私がそれに対して同調や反駁をし、最終的に結論を提示するようにしています。

Nさんは、この講座を受講するまでセンター試験の問題に触れる機会がなかったようで、開講当初は問題文を読解することに四苦八苦しているようでした。しかし、多くの文章を読むうちに、評論文には論理構造が存在するということが、感覚的に理解できてきたようです。そして、その構造を読み解くコツも、掴みつつあるように思います。また、解答にあたっては、Nさんは根拠をもって肢を選ぶ習慣ができています。

先日、Nさんは、学校で今年度のセンター試験の問題を解いてみたそうです。その結果、現代文については申し分ない点数がとれたそうです。ともに文章を読み、議論を重ねた成果が出ているのだとすれば、なんとも嬉しい限りです。そして、Nさんの飲み込みの早さに、脱帽です。

こうして、ことばのクラスでは、主としてセンター試験の対策を行なっておりますが、長い目でみると、Nさんにとっては、ことばを通じてみずから表現する力を養うことも有意義だと考えています。そこで、時にはNさんの進路に直結するような内容の文章を読んでもらい、小論文を書いてもらうこともあります。また、今後は読んだ本や観た映画、その他、感動した事柄等について、ことばを通じて表現してもらう時間ももうけてみたいと考えています。

そうした作業を通じて、Nさんが、ことばのもつ魅力やことばに潜在する可能性を感じ取ってくれることを、願っています。

(文責 和田 浩)

『英語の基本』 中1年生 (火曜4限) 担当 岸本廣大

早いもので、このクラスの生徒さんが英語を本格的に学び始めてから、一年が経とうとしています。彼らは様々な点で、確実に成長しています。クラスでは、春学期から一貫して「単語」と「文法」を中心に、英語の学習を進めてきました。「単語」では単語の確認に、「文法」ではプリントや学校での課題に毎週取り組んでいます。それぞれに成長が見えた様子を、ここで紹介しましょう。

単語の確認は、毎週6つほどの単語のスペルや意味を答えるもので、間違えた問題は次週に持ちこすというシステムになっています。つまり、間違えを放置すればするほど毎週の負担が増える仕組みです。逆に言えば、毎週しっかりと復習すればたいした負担にはなりません。秋学期には「単語記憶帳」を導入するなど、意識して単語に取り組むよう促したのですが、冬学期初めの総復習での結果はあまり芳しくはありませんでした。そこで冬学期は、総復習の復習を行うことにしました。どういうことかということ、これまで出題した100ほどの単語を全て出題し、間違えた単語はこれまで同様に来週に持ちこします。それら全て正解するまで、これを何度も繰り返すのです。この取り組みはまだ続いています。最近(2/1)一人の生徒さんが全ての問題に正解してくれました。話を聞いていると、この生徒さんはクラスの単語以外にも、単語帳やカードを使って、独自に単語学習を行っているようでした。一年近い単語の確認の取り組みを通じて、単語を自習できるようになっているのは立派な成長の証です。

文法については、あまり多くの事は教えていません。しかし、大事な点は私は何度も繰り返し生徒さんに伝えていきます。それが「be動詞と一般動詞の否定文、疑問文」です。というのも、この点をしっかりと理解しておけば、現在(あるいは過去)進行形や助動詞にも、広く応用がきくからです。確かに、この点だけで英文法の全てがわかるわけではありません。しかし、これがわからなければ、英文法の全てを理解することはできません。つまり、「be動詞と一般動詞の否定文、疑問文」は英文法の必要条件なのです。それを意図して、冬学期には様々な問題を生徒さんに解いてもらっていますが、その際「これは動詞が一般動詞だから、…」というつぶやきが、聞こえるようになってきました。私の意図を理解して問題に取り組んでいる様子は、文法というものに対する彼らの姿勢が成長した証といえるでしょう。

このように、見事に成長した生徒さんですが、単語や文法にまだ見られる間違いや理解が十分でないところがあるのも事実です。こうした「課題」はネガティブに捉えられがちですが、むしろ今後の成長の余地がまだまだあるとポジティブに捉えた方がよいでしょう。彼らの成長は、ここで終わりではありません。その成長を促進できるよう、わずかではありますが、残りの期間も生徒さんに喜んでつきあっていきたいと思えます。

(文責 岸本廣大)

『英語の基本』 中2年生 (水曜3限) 担当 浅野直樹

早いもので気がつけば中学2年生も終わろうかとしています。今年度の最初のころは過去形すら怪しかったのが、今ではto不定詞や比較などをも使いこなすまでになっています。英語という科目で考えると特にこの時期の飛躍には驚かされます。このクラスには3人の生徒がいますが、振り返ってみるとそれぞれが違った形で成長したように感じました。この場を借りて記録を残しておきます。

Kさんははっきり言ってよくできます。すべての教科を通じて自ら学習する姿勢が身についているようです。それでも思い返してみると最初の頃は簡単なミスが非常に多かったことを思い出しました。さらにさかのぼって中1のときのKさんの状況をブログの記事から想像してみると、決してもともと英語が大の得

意だったというわけではなさそうです。中 1 あるいはその直前から、アルファベットを正確に習得する、習った単語はきちんと覚える、文法事項を理解するといったことを積み重ねてきたおかげで今の姿があるわけです。土台がしっかりしているので、本人の質問に応じて発展的な事柄を伝えてもよく吸収してくれます。このままだこまでも進んでくれたらいいです。

O さんは英語に抵抗があるようです。特に最初の頃はこちらが思いも及ばないほど英語に抵抗があったようです。それはおそらく日本語によくなじんでいて、そのせいで日本語と大きく構造を異にする英語に対してはより違和感を覚えてしまうからでしょう。日本語へのこだわりがいい方向にできれば助動詞の丁寧度合いをうまく訳してくれることにつながったりもするのですが、悪い方向に出ればつい日本語の語順で考える、主語と動詞をはっきりさせない、前後の文脈で話を想像して読んでしまうということになりがちです。今の段階では日本語と英語の違いに漠然と気づきつつあるくらいです。その違いに目を覚まさせられると、英語はもちろん、日本語への理解もきっと深まると思います。最近始めた英語の本を読むという取り組みが、その助けになることを期待しております。

S さんからは何度か大きな山を越えたという印象を受けました。今だから言えることですが、最初の頃はひどい状況でした。過去形以前に、英語がほとんど理解できず、全く未知の言語と格闘しているような様子でした。それでも何度も辞書を引いてどうにか理解しようとする姿が印象的で、一度たりともあきらめることはありませんでした。そうしてしばらくたったときには主語と動詞があるという英語の構造をしっかりと理解し、また別のときには be 動詞と一般動詞の違いや時制について理解できていることに気づきました。一度軌道に乗るとあとは楽で、今では to 不定詞なども一通り理解できています。次の山場は頭での理解を超えて英語を英語のまま身につけることです。

(文責 浅野直樹)

『英語の基本』 高2年生 (月曜4限) 担当 百木 漢

N さんの英語力は着実に伸びているようです。昨年 12 月末の中間テストでも大幅に点を伸ばし、自分でも驚くほどに良い点が取れていました。基本的な単語力がついてきたのと、高校範囲の文法の基礎をだいたい押さえられたのが大きかったのだと思います。教科書の長文読解力(和訳の力)も毎回進歩しているなど感じますし、今が一番成績が伸びている時期なのかもしれません。これまで地道に勉強を続けてきた成果が出始めているのでしょうか。ぜひこの調子で今後もがんばってほしいです。

学校の教科書は長文も文法も高2の範囲はひととおり終わりました。あとは復習と練習問題の積み重ねをやっていく予定です。N くんはそろそろ一年後に控えたセンター試験のことも気になり始めているようです。志望校も決まり、目標とやるべきこともはっきりしてきました。先日、学校で今年のセンター試験を解いてみたそうですが、どの科目もだいたい4割程度の出来だったとのこと。1年前の時点で4割取れていれば、悪くない方だと思います。目標は1年後に8割取れるだけの実力を身につけていることです。これは本人自身が立てた目標なので、ぜひその目標に向かって1年間努力し続けてほしいです。

以前は面倒くさそうにしていた毎週の宿題も、最近では積極的に解いてきてくれるようになりました。きっと自分の努力がちゃんと身につけて実力として跳ね返ってくることを実感しているからではないでしょうか。勉強というものは、分からないうちは面白くないものですが、「努力すればちゃんと分かるし、成績も伸びる」という実感が持てれば、途端に面白くなってくるものです。実際に中高生時代の自分がそうだったのでよく分かります。N くんは、今は勉強すればするだけ英語の力が伸びる時期だと思うので、どんどん勉強してさらなる実力と自信をつけていってほしいです。

今後の予定としては、冬学期中は基礎練習(単語、文法、教科書長文の復習)を続けるつもりです。来春からはセンター試験を意識して、実戦的かつ応用的な問題を多く解いていきたいと考えています。1年後にN くんが立てた目標をきちんと達成できているように、一緒に頑張っていきたいです。

(文責 百木 漢)

『英語の基本』 高2年生 (木曜3限) 担当 浅野直樹

中学・高校と英語をしっかりと学習してきたならそろそろ文法は一通り理解できるという段階になっていると思います。ここまで来るとあとはどれだけ単語や熟語、慣用的な表現を知っているかということになります。

単語と熟語は脇に置いて、ここでは慣用表現に焦点を当てます。英語の意味がわからないと質問されるときも、問題の答えがわからないと質問されるときも慣用表現が関わっていることが多いです。一口に慣用表現といっても直訳でもある程度の意味が通るものから覚えるしかないような表現まで存在します。以下でいくつか紹介します。

・ 直訳でも意味が通じる慣用表現

1. **Babies do nothing but cry.**
(赤ん坊は泣く以外の何もしない。) ⇒ (赤ん坊というものは泣いてばかりいるものだ。)
2. **His story was anything but boring.**
(彼の話は退屈以外の何かだった。) ⇒ (彼の話は決して退屈ではなかった。)

この2つの表現は"but"が鍵になっています。butには「～以外」という意味があります。

3. **We don't appreciate the blessing of health until we lose it.**
=It is not until we lose the health that we appreciate the blessing of it.
=Not until we lose the health do we appreciate the blessing of it.
(健康を失うまでそのありがたさがわからない。)
⇒ (健康を損なって初めてそのありがたさがわかる。)

英文の2行目は強調構文、3行目は否定語句が文頭にきて倒置になっています。

4. **You cannot be too careful when you swim in the sea.**
(海で泳ぐときはいくら注意深くなりすぎることはできない。)
⇒ (海で泳ぐときはいくら注意してもしすぎることはない。)
5. **I couldn't help laughing.**
(私は笑うことを避けられなかった。) ⇒ (私は笑わずにはいられなかった。)
6. **The music is what is called "rap".**
(その音楽は「ラップ」と呼ばれるものです。) ⇒ (その音楽はいわゆる「ラップ」です。)

cannot や what には慣用表現が多いです。

・ 覚えるべき慣用表現

1. **There is no accounting for tastes.**
(好みを説明することはできない。(蓼食う虫も好き好き))
2. **It is no use crying over spilt milk.**
(こぼれたミルクのことで泣いても無駄だ。(覆水盆に帰らず))

これらはことわざで覚えるとよいです。

3. **The boy is used to making his own breakfast.**
(その男の子は、自分で朝食を作ることに慣れている。)

助動詞の"used to"と間違えないようにする必要があります。

4. **It goes without saying that health is more important than wealth.**
=Needless to say, health is more important than wealth.
(健康が富に勝ることは言うまでもない。)
5. **The drama was not so much a tragedy as a comedy.**
=The drama was a comedy rather than a tragedy.
(そのドラマは悲劇というよりは、むしろ喜劇だった。)

この2つは書き換えできるということを含めて覚えると楽でしょう。

こうした慣用表現は丸暗記しようとしてもきりがないので、いろいろと工夫しながらよく見るものから親しんでゆけば十分でしょう。

(文責 浅野直樹)

『英語の基本』 高3年生（水曜3限） 担当 上尾真道

高校三年生の生徒さんにとって、この冬学期はまさしく正念場でありました。秋学期の際にも述べたように、受験対策としては、第一に「基礎文法」、第二に「語彙の強化」、第三に「長文読解」に継続して取り組んできました。「基礎文法」としては、時制・態・助動詞などを使っての単文の構成についてはひととおり完了したので、第三の「長文読解」へとつなげるべく、接続詞や関係代名詞など、複文の構成に関わるところを中心に復習していきました。2011年に入ってからは、こうした事項の復習は本人に任せ、授業は問題を解くことを中心に行いました。

さて、試験での長文も含めて英語の文章を読解するということに、全般にわたり大事なことは、英語の順序に従いながら英語のリズムで文章を読んでいくということであると私は考えます。つまり、それは和訳をしながら読むのではない、ということです。まず注意しなければならないことは、「英語を読む」、あるいは「英語を理解する」ということは、「英語を日本語に翻訳する」ということと同義ではないということです。英語の文章は、なによりまず目で追いかけている順序に従って、あるいは耳に入ってくる順序に従って、受け取っていく必要があります。もちろん、英語の語順は日本語のそれとは異なりますので、今述べていることは、ある意味で非常に難しいことです。いわば、今まで物事を理解してきた仕方とは、違うやり方を身に着けなさいというようなものです。しかし結局、英語の試験や日常会話においては、なによりこの方法を身につけておくことが要請されることになるわけですから、最初から困難な道に行くことが最終的には近道だとわかるだろうと思います（個人的な考えでは、学校教育における英語リーディングの授業でも、その導入の時点からこうした読み方が強調されるべきだと考えます）。この高校英語のクラスでも、これまで英文の解釈をさせるときには、基本的に和訳させるのではなく、英文の順序に即して理解したことを話してもらうようにしてきました。受験では、英語長文を読むときに、この蓄積の成果が現れてくれることを願います。

（文責 上尾真道）

『数の基本』 中学生（水曜4限） 担当 浅野直樹

どこまで自分の頭で考えて、どこから先人の作った便利な道具を使うかというテーマが浮かび上がりました。

例えば方程式といかに付き合うかということです。方程式は中1で長い時間をかけて学び、それから発展させていくこととなります。小学校までは苦勞して解いていた複雑な問題を簡単に解くことができるようになります（逆に言うと中学入試の算数は特殊であり、数学が得意な人でも苦勞することがよくあります）。他方で問題文に登場する数字を何となく方程式に組み上げて、それらしい答えを出すということをする人もいます。それでは意味がありません。本質をつかみながらうまく道具を使うといったバランスがやはり大事です。

もう一つ中学数学の範囲から例を出しましょう。おうぎ形で半径と弧の長さがわかっているときに面積を求めたい場合に S （面積） $=1/2 \times l$ （弧の長さ） $\times r$ （半径）という公式が使えると教科書に書いてあります。しかしこの公式は直感的に意味をつかみづらくて使うのに抵抗があります。弧の長さから地道に中心角の大きさを求め、それを使って面積を出すほうが安心です。時と場合、そしてその人の好みに応じて二つのやり方を使い分ければよいと言えますが、個人的にはこの公式をあまり好きになれません。私が中学生のときももっぱら地道なやり方ばかりしていました。

図形の証明をするときにも同じ構造が見られます。ある四角形が平行四辺形であることを示すときには4つ（定義そのものを含めると5つ）の条件がありました。証明の記述をするときにはその条件に合わせて型にはめるほうが書きやすいです。よく考えるとその条件で平行四辺形になることは必ずしも自明ではありませんが、一度その条件で平行四辺形になることをさらっと確かめるくらいで、後はそれを疑わないのが普通でしょう。

この問いは複雑に専門分化した現代社会に生きる我々にもつきまといまいます。現在ではパソコンを使っている人が多いと思いますが、その仕組みを理解している人はほとんどいないでしょう。私はそれが気持ち悪くてできるだけ本質に迫ろうと自作パソコンを組み立てたり、プログラミングを学んだりしています。しかしそれでもパソコンを完全に理解しているとは到底言えません。パーツを組み立てることはできても天然の材料からそのパーツを作ることなどできませんし、あるプログラミング言語をいくら使ってもプログラミング言語を開発できるレベルではありません。そこまでできるのはごく一握りの専門家だけです。いや、そのような人はそもそも存在しないのかもしれない。

それでも道具を使うだけで満足せず、少しでも本質に迫ろうとする姿勢は忘れてほしくないです。

（文責 浅野直樹）

『数の基本』 高校生（木曜4限） 担当 浅野直樹

前号では数学を学習する段階について記述しました。今号ではそのうちの一段階である、問題を解くことに焦点を当てます。

解説を読んだらわかるけれども試験などで問題を解くことができない、という悩みを抱えている人は多いと思います。解説を読んだらわかるという段階に至るまでに相当な努力を積み重ねていることをまずは強調したいです。なかなか結果が出ずに不安になることもあるでしょう。特にマーク式の試験ではまったくわからないのとほとんどわかっているのに答えられないのとを区別できません。外から眺めているだけでは土の中にもうすぐ芽を出しそうな種があるのがわからないのと同じです。

この段階では問題を解いては解説を読んで反省するということを繰り返すしかありません。もう少し詳しく言いましょう。最初は典型例題を解説を写すくらいの感じでまねしながら何度か解くことです。その際にだんだんと解説部分を見る回数が減るはずですよ。理解とともに解説をまとまりとして理解できるようになります。そのうち問題文を見ただけで解けるようになるでしょう。何度も解けずに苦労した問題については、問題文さえ頭の中で再現できるということもあります。

次はその例題の類題を解くことです。例題の段階でしっかりと理解していればここでつまづくことはあまりありません。多くの教科書や参考書で類題は単に例題の数字を変えただけですから。その次はある程度まとまった範囲での総合問題です。章末問題という名前になっていることが多いです。ここでは新しい視点や切り口に出会うでしょう。

そして最後は単元を超えた融合問題です。入試問題の多くはこれに該当します。例えば垂直ということを用いて方程式やベクトルで表したりすることです。ここが一番難しいところであり、一番面白いところでもあります。

このように問題を解いているとこれまでは感じなかった疑問を感じることもあります。あるいはなぜその解法が思いつくのかという質問もあるでしょう。そういうときには質問してもらえれば、単なる経験則から数学的な推論を駆使してどうにか答えるように努めます。自分で頭を使って手を動かして悩んだという経緯があるからこそその答えが生きてきます。

(文責 浅野直樹)

『化学』 高3年生（水3・4限） 担当 上尾真道

受験を控える生徒さんは、総復習として私が渡しておいた問題集を、目標どおり、2010年のうちに仕上げてくださいました。化学は、とても覚えることの多い科目ですが、一度、全体をしっかりと見なおしておくことによって、学校で習っていたときにはバラバラに覚えておくだけであった各要素のあいだに、うっすらとつながりが見えてきます。そのような意味では、問題集を使った総復習が完了したということはとても大きな成果であり、ここから知識のネットワークをより濃密に張り巡らせて行くことが可能になりました。

2011年に入ってから、専ら実践的な課題を通じて、化学の知識の取得に取り組んでいます。総復習を終えた今であるからこそ、自分の解けなかった問題の意義や、化学の知識全体におけるその位置づけなども理解することができるでしょう。あとはなるべく多くの問題にあたり、それぞれの概念や言葉や物質の間になるべく多くの関係の線を引けるかどうか、ということになるかと思います。より具体的な試験対策について言うならば、暗記すべきことの多い化学の場合、全てを覚えておくということは、試験問題のバラエティから考えるならそれほど効率よいとはいえません（もちろん、ひとつひとつ覚えていくことが大事であることは言うまでもありませんが）。一方、計算やそれにまつわる理論に関することは、様々な試験に共通して出題される可能性が高いという意味では、得点のチャンスということになります。一見、難しいところですが、まさにそこにこそチャンスはあります。試験までにしっかりと復習しておきたいところです。

(文責 上尾真道)

『ロボット工作』 中学生（金3限／隔週） 担当 福西亮馬



（ロボットに光を追跡させて、ライントレースに挑戦中）

ロボットの第一人者に、古田貴之さん（千葉工業大学未来ロボット技術研究センター所長）という方がいます。この間、その方がインタビューに答えている記事を知って、授業で輪読しました。

古田さんは幼い頃をインドで過ごし、日本に戻ってからも習慣の違いから一人である時間が長かったそうです。その時、親に買い与えてもらったレゴで遊んでいるうちに、次第にロボットに興味を持つようになるのですが、その頃から、鉄腕アトムやマジンガーZよりも、「それを作った天馬博士や兜博士の方が偉い！」ということを感じていたそうです。そして自分もいつか「ロボットを作る人になるんだ」という夢を持っていたそうです。しかしそこまでは、もしかしたら誰も一度は思い描いたことがあるのかもしれない。

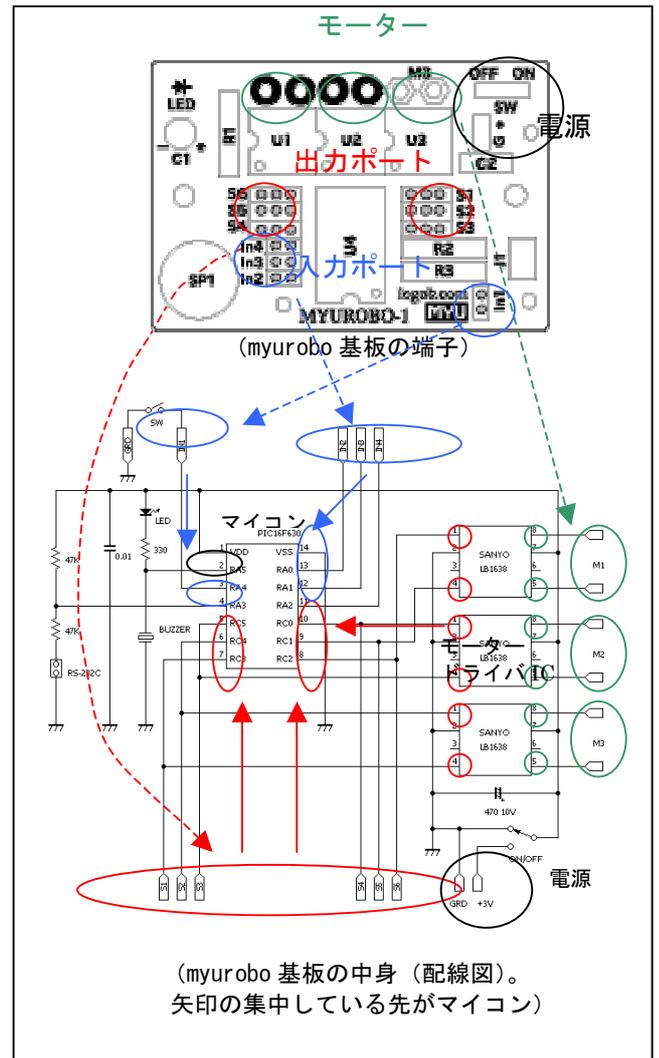
しかし古田さんが中学生の時に、大きな転機が訪れました。脊髄の病気にかかって足の筋肉が動かなくなり、車椅子生活を余儀なくされたのです。もしかしたら次は腕、そして心臓の筋肉が止まるかもしれない——そのような状況で脳裏をよぎったのが、幼い日の夢でした。その時、障害のあるなしに関らず誰もが思わず乗りたくくなるような「カッコいい車椅子ロボットを作りたい」という希望が芽生えたのでした。そしてロボットが人間の形をしているかどうかよりも、「人間の役に立つかどうか」ということを強く意識するようになったそうです。その心は研究者である今も変わらず、「便利なものをこれ以上便利にしようというのではなく、不便なものを不便でなくしたり、つらいものをつらくなくしていきたい」とインタビューでは答えられています。

夢を持ち続けたおかげか、古田さんはそのあと奇跡的に回復します。そして子どもの頃の夢に向かって邁進すべく、新しいことにも果敢に挑戦して、ロボットに必要と思われる知識をどんどん吸収していきます。実際、ロボットには総合的な知識と経験が必要ですが、なにせ当時は誰もやったことのない「変人」と思われる道だったので、人に聞くわけにもいかず、ほとんど自分で調べたり試してみるしかなかったそうです。その情熱はしかし自身の車椅子生活で感じた使命感に支えられて涸れることはありませんでした。大学に進む際にも、偏差値がいくらだからここにする、という安易な選び方ではなく、ロボットで有名な先生がいるからということに第一義に考えたそうです。今から二十年以上も前の話です。

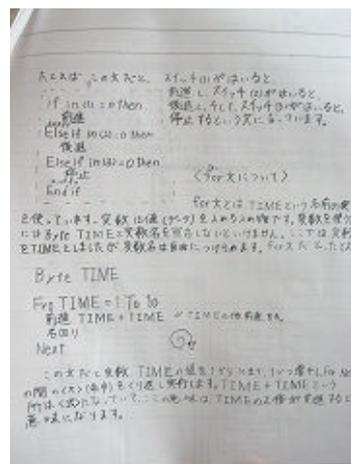
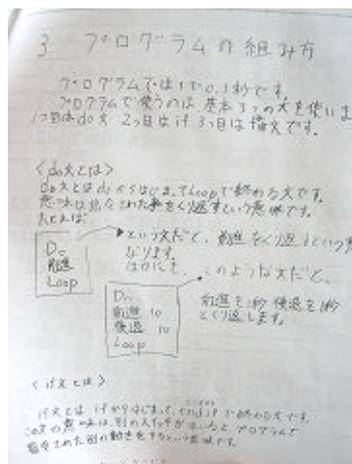
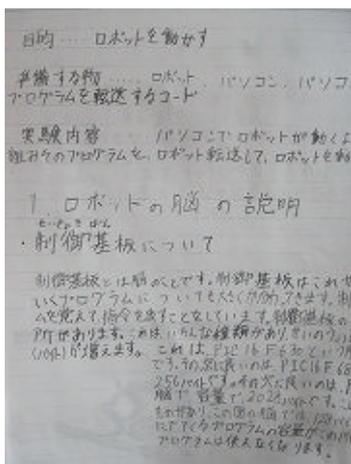
私もそのことで、生徒たちに強く念を押ししました。今は昔と違って、インターネットをはじめ調べる方法がいくらでもあり、単に大学に入るために勉強するのではなく、自分でその意味を探しながらするようにと伝えました。それは生徒たちの胸にも響いたようで、いつもと目の輝きが違って見えました。

授業では、試行錯誤を重ねながら次第に本格的なことをしています。先の図にあるように、基板にある入出力端子（導線をつなぐ穴）から回路図をたどっていくと、マイコンの16本のピンにたどり着きます。

そこで、導線をいつものように端子（穴）に挿すのではなく、マイコンのピンに直接触れさせてみます。すると、実は同じようにモーターやセンサーが作動します。それを自分の目で確認し体験した時には、ロボットの本質を見たようで、思わず感動します。というのは、私たちは普通おもちゃや電化製品というのは、必ずスイッチで動かすもの（それを触らないと動かないもの）と思い込んでいるからです。スイッチはあく



まで表象装置であり、それが肩代わりしていることとは、必要な回路に電流を流すことです。つまり表のスイッチ部分を取り外しても、中で電氣的に「つながり」さえすれば、同じくスイッチが入るのです。そのことを理解した時、ロボット工作はより面白さの深みを増していきます。



K君が学校の自由研究でロボット工作のことをまとめてくれました。そのレポート（下書き）。左が1ページ目、右の二枚はプログラムの説明です。経験し学んだことを自分の言葉で咀嚼して理解しようと努めています。このあと自ら率先して清書を重ねていました。その気持を忘れず、いつまでも原点にしてほしいです。

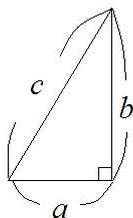
ロボットを進化させることは、それを作っている自分自身をも進化させることにつながります。「知る」ことは昨日とは違う自分に生まれ変わることを意味し、その手ごたえで勉強の意味がより明確になります。

「何のために勉強をするのか」というネガティブなつぶやきは、ロボット工作においてはナンセンスです。「そこにロボットがあるから」で、今している総合的な知的好奇心の発現は、将来何かをする時において必ずやその雛形になるものと信じています。

(文責 福西亮馬)

『ユークリッド幾何』中学生（金3限／隔週） 担当 福西亮馬

$$a^2 + b^2 = c^2$$



冬学期は、ユークリッドの『原論』第1巻に書かれた命題47、すなわち『三平方の定理（ピタゴラスの定理）』と、その周辺の定理の証明に取り組みました。

『三平方の定理』は、中学3年生になると誰しも一度は習います。ただその時に黒板を書き写すことだけで知り、あとは問題集で受身に練習を積むだけでは、あまりに感動が薄く勿体ないことだと思います。

この定理を能動的に、生の体験として得たことは、その後も限りなく豊かな数学の世界を垣間見させてくれることとなります。たとえば「最小二乗法」や「正規分布」（二乗誤差）、量子力学におけるヒルベルト空間の「直

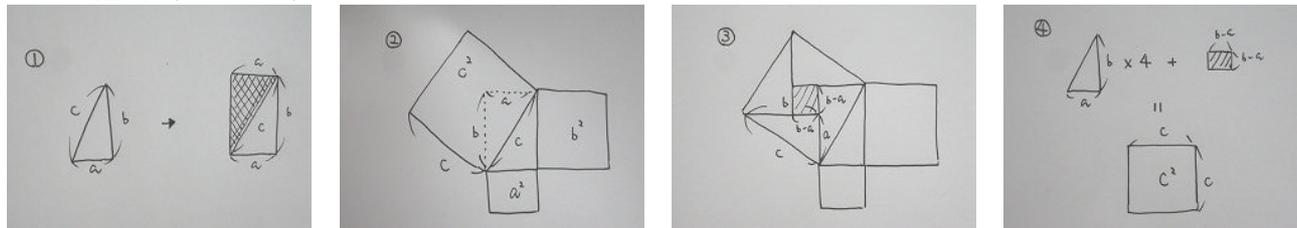
交射影」、また工学上でも重要なフーリエ変換の勉強に現れる「パーセバルの等式」には、この定理の直角三角形が登場します。そのように数学の至るところでこの定理が関係しています。（あるいはそれらをこの定理で再解釈することで、より深い理解が得られます）。

私見を述べると、「直角」という幾何の言葉と、「二乗」（の積分）という代数（また解析）の言葉は、この定理を一つの橋渡しにしていますが、そのような概念の往来にどれだけ感動を覚えることができるか、それが、数学を「深く味わう」ことだと言ってもよいほどです。事実、この定理にはその都度の新しい発見があり、今でも数学の主要な源泉の一つであることは間違いありません。

この定理の証明には、今知られているだけでも百通り以上もあるそうですが、その中にはユークリッド本人、レナルド・ダ・ヴィンチ、またアインシュタインのものも含まれています。そして今もなお数学を愛する人たちの手によって、その証明の数は増え続けています。

授業では、この定理の証明の下に自らの手で Q.E.D. と書き込むことを目指して、数週間に渡って取り組んできました。三者三様のアイデアがそれぞれの生徒に見られました。全員の過程をここで説明できないのが残念ですが、以下では最もシンプルな解法であった H 君の証明を紹介します。

H 君の証明 (アイデア)



H 君はまず①のように、直角三角形を二倍にして長方形にするところから考え始めました。そして相当頭を悩ませた後、②のような図との「組み合わせ」の着想を得ます（これがアイデアとして一番大きなものでした）。その後③では、1 辺 c の正方形の中を分割して、「組木細工」にすることを思いつきます。すなわち c^2 の中に分割して作った直角三角形 4 つと、すき間にある小さな正方形との面積の和は、一番外の正方形 c^2 に等しい、という方程式が作れます (④)。

c^2 の中にある直角三角形は、ちょうど問題で与えられているものと同じです。よって、その 4 つの面積は、 $a \times b \div 2 \times 4 = 2ab$ です。またすき間の小さな正方形の面積は、一辺の長さが $b-a$ なので、 $(b-a)(b-a) = b^2 - 2ab + a^2$ と求まります。（ここでの式の展開は、今している勉強とも重なって意義深い刺激になりました）。よってその合計面積は、 $2ab + b^2 - 2ab + a^2 = b^2 + a^2$ 。一方これが一番外の大きな正方形 c^2 と等しかったことを思い出せば、 $a^2 + b^2 = c^2$ となり、**Q.E.D.**です。証明できました。

ちなみに a^2 や b^2 の正方形を分割しても同じように考えることができます。実際その方法には今 K 君が着手してくれています。ただしやってみてはじめて気が付くのですが、こちらの方が上の解き方よりも格段に計算が難しくなっています（比例の考えにより、4 乗の項が現れます）。それでも K 君は恐れずに、「これが自分のやり方だ」というポリシーを持って勢い取り組んでいます。またもう一人の A 君は、これまた一味違った作図による道筋で考え中です。二人とも私の見る限りでは、あともう少しのところまで来ているので、この原稿が届く頃には、自身のノートに「**Q.E.D.**」と書き込んでくれていることでしょう。

さて上の H 君の解き方は、もし冷めた言い方をすれば、参考書のどこかに書いてある（あるいは今発見されている百通り以上の証明のどれかに当てはまる）ことかもしれません。仮にそうであっても、「自分で考え出したこと」は事実であり、あたかも世界で最初にそれを考え出した人間のように、「熱く解いた」ことには意義があります。少なくとも彼自身にとっても大きな喜びがあります。実際、H 君はさらに気をよくして、自らの意思で二通り目の解き方に挑戦してくれています。

そのように、自ら精神を駆り立てる者にだけ得られる深い喜びが、幾何学にはあります。

(文責 福西亮馬)

「一般」の部

『古文講読』(水曜 3 限)

担当 前川 裕 ゆたか

『枕草子』を岩波文庫版で最初から順に読み進めているこのクラスは、1 月末現在で 60 段まで到達しました。いくつかの校注版を参考にしていると、章段の順序が異なる部分なども散見され、本文の歴史を考える上で面白い材料です。

お一人の受講者とともに、着実に読み進めています。朗読と訳読を行い、その後意見交換をしながら、平安時代の心性や清少納言の人柄などについて考えています。「ものづくし」の段においては、今は知られなくなった地名やものが現れ、また現実に存在しない、清少納言が人聞きに(?) 知ったような内容もあるようで、当時の人々の関心がどの辺りにあったのかを伺わせます。

清少納言の好みや人柄は、有名な章段だけでなく、『枕草子』全体から探求することが必要だと思われま。通説とは違う点などが見られるマイナーな段を読むと、我々の知っている清少納言像が一面的になりがちであることを思い知らされます。

高校程度の文法をご存じであれば十分です。ご興味のある方はぜひ山の学校までお問い合わせください。

(文責 前川 裕)

13・14 ページの推理クイズの答…レストランの会食などで、もし 13 人しか集まらないようなグループがあった時、(最後の晚餐を連想する)「13」という数を避けるために、この 14 番屋が呼ばれる。つまり「場を 14 人にするために座る」のが彼の仕事。

『ラテン語初級文法A』(木 14:10~15:30) 担当 山下大吾

蝉しぐれの降る中アルファベットから始まった当クラスも、いつしか紅葉が過ぎ、今では白い息を吐きながらお山の階段を上るようになりました。刺すような真昼の日差しも懐かしく、ふと気付けば、学びの場である離れの間を木々の間から柔らかに照らしています。二学期制で始まった当ラテン語初級文法 A クラスは、お一方の受講生を迎え、毎週ゆっくり急げの歩みを進めております。

初めての試みとして始まった二学期制のカリキュラムですが、前学期乗り越えた名詞形容詞の第三変化に続き、今学期では動詞の接続法も無事その「山」を登り終えました。この数週間は、その日学ぶべき新しい項目と並び、過去に学んだ項目を可能な限り復習する授業が行われています。

山の学校開校以来行われている、一学期三箇月でラテン語文法の基礎を習得する速習コースの利点を活かしつつ、倍となった時間を有効に活用しております。古典からの直接の引用を通して、当日学んでいる項目の確認を行えることがその一つと言えましょう。関係代名詞の項目では、ホラーティウスの *Beatus ille qui procul negotiis* 「幸いなるかな、俗事を離れたる者」、並びにその応用として、ウェルギリウスの *Urbem quam statuo vestra est* 「私が建てている都はあなた方のもの」という章句を紹介いたしました。更に後者が、一見破格と思えながらも、実はその言葉を口にした女性 *Dido* の、*Urbem praeclaram statui mea moenia vidi* 「私は素晴らしい都を打ち建てた、我が都市を見届けた」という辞世の句と呼応していること、ウェルギリウスならではの詩的技法の一端を、受講生の方と共に味わうことが出来たのです。

ある日の授業のことです。いつものラテン語和訳問題の途中で受講生の C さんがにわかに口ごもりました。ある一語の意味、文法事項がどうしても理解できないようです。失礼なこととは思いつつ、ふと C さんのノートに目を留めると、その一語に似た語を、辞書を引き引き可能な限り書き留められた跡が見て取れます。正解はすぐに分かりましたが、その語にまつわる「ドラマ」は、C さんの心にいつまでも残り続けるのではと思われまふ。むしろ易々と「正解」にたどり着いた方よりも、数等貴重な経験となるのではないのでしょうか。かく言う当方もその例にもれず、その語に現れた二重母音の処理、解釈に、その後長く悩まされることになりました。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読 B』(水曜 4 限) 担当 山下大吾

前任者である前川先生から引き継がせていただいた当ラテン語初級講読 B クラスも、私が担当するようになってから既に三学期目となり、早いもので一年が経とうとしております。テキストは変わらずキケローの哲学的対話篇『友情について』で、開講以来受講されているお二方と共に、毎週楽しくも真剣な授業が行われております。

一語一語キケローの言葉を噛みしめるように進んでいくスタイルは依然として変わりありません。今学期の範囲では、「目的の与格」あるいは「述語の与格」というあまり見かけない、と同時に中々興味深い文法事項が現れましたが、それが用いられた例として *Odi odioque sum Romanis* 「私はローマ人を憎み、また憎まれている」というリウィウスの伝えるハンニバル辞世の言葉を紹介いたしました。「ラテン語って、格言に最適ですね」とは受講生 H さんの感想です。そのほか楽しい息抜きとして、*Tarquinius Superbus* が現れた折には、漱石『猫』の苦沙弥迷亭両先生にご登場願ひ、その「七代目樽金」の講釈に耳を傾けることとなりました。

「名誉公職や国政に携わる人々の間に真の友情を見つけるのは至難の業だ」—64 節で読むことになったこの言葉は、この対話篇を記していた当時のキケロー自身の状況を鑑みると、この上なく重々しく響いてきます。悲劇的な死の前年、既に崩壊の危機にありながらも、なおその理想を信じて共和制の護持に奔走していた彼は、まさに国政のただ中にその身を投じていたのです。やがて政敵アントニウスとの衝突は避けられぬものとなり、首都ローマを避け自身の別荘に引きこもり、この対話篇を始め数々の著作の執筆に勤しみましたが、その際ラエリウスの口を通して語られたキケロー自身の慨嘆とも言っていいいでしょう。

Amicus certus in re incerta cernitur 「確かな友は不確かな状況で確かめられる」—広く知られる一聴忘れがたきエンニウスの章句は、上掲引用句の直後に見られるものですが、実はそのような友は極めて見出しがたいという説を固めるために引用されたものでした。しかしながら同時に、これ以上考えられない不確かな状況の中、彼が求めて止まなかったのはやはりそのような友であった、今こそ確かめられるはずだという痛ましいまでの願いがこめられた、キケローその人の叫びの声として響いてくるように思えてなりません。

(文責 山下大吾)

『ラテン語初級講読C』（金曜4限）

担当 前川 裕 ゆたか

引き続きセネカ『ルキリウスへの手紙』を、2名の受講者とともに読んでいます。

第26書簡では意外なことに？、人生への愛がやや肯定的に述べられます。もちろん、それは最小にされるべきである、とはいうのですが。人生を否定して厭世的になるのではなく、また人生に重きを置きすぎるでもなく生きることが必要だ、という考えがあるように思われます。

また第28書簡では、気晴らしのための旅は有効ではなく、旅をする前に心の重荷を取り除け、と語ります。悩みを抱えたまま旅をしても何も変わらない、とは、まさに現代でも通用する考え方でしょう。

「山の学校」ブログでも、印象に残った一文を紹介していますので、どうぞご覧ください。

毎回Loebの本文で17行程度を読んでいます。読み上げるのが早くなったこともあり、残り時間は小ネタを提供しています。ネット上にある『ルキリウスへの手紙』の朗読を聴いたり、古代ローマに関する本を紹介したりしています。このネタ探しの中で、シャーロック・ホームズのラテン語翻訳(!)があることを知りました。

初級文法を一通り学んだ方であればご参加いただけます。一緒にラテン語の世界を歩いてみませんか。
(文責 前川 裕)

『ラテン語入門・中級講読』（月4限・金4限）担当 広川直幸

入門の授業では、引き続き、Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana* を用いてラテン語の基礎を学んでいる。現在、第28課を学習中である。教科書は全35課で構成されているので、順調に進めば、次の学期で終えることができるであろう。

第27課から緩やかに接続法の学習が始まった。接続法の活用は非常に易しいものではあるが、それは直説法がきちんと身に付いているならばの話である。接続法、とりわけその現在時制を学びながら混乱を感じるようであれば、直説法の定着度が低い可能性が高いので、直説法の活用を十分に復習してから接続法を学び直すことを勧める。

週に一度の、しかも80分という限られた時間では、授業中に十分な練習をすることは不可能である。各人の自習に期待せざるを得ない。本文を読み、それを応用して作文をするという練習を毎日少しの時間で構わないので実行していただきたい。

中級講読では、ウェルギリウスの『農耕詩』をのんびりと読み続けている。ようやく最終巻である第4巻に入った。このところ、一回に読む量がだいぶ減っている。言うなれば蕎麦をくちやくちや食べているようなもので、これでは醍醐味は味わえない。蕎麦はある程度の量をズルッと一息で食べてこそその蕎麦である。文章を読む場合にも同じことが言える。一度に読む量があまりに少ないと、内容の理解に支障をきたす。それゆえ、今後は一度に読む量を増やして、来学期で第4巻を読み終えるように調整しようと思う。『農耕詩』を読み終えたらすぐに『アイネーイス』に進む。ウェルギリウス読破がこの授業の目標である。

(文責 広川直幸)

～山の学校・古典の夕べのご案内～

第2回

ギリシャ語のゆうべ

とき 3月12日(土)

午後4:30～6:00(参加無料)

講師 広川直幸(山の学校古典語講師)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

演題 『Οὐκ ἐκ χρημάτων ἀρετὴ γίγνεται,
ἀλλ' ἐξ ἀρετῆς χρήματα』
——ことばが人を裏切るとき——

第21回

ラテン語のゆうべ

とき 3月12日(土)

午後6:30～8:00(参加無料)

講師 山下大吾(山の学校古典語講師)

場所 北白川幼稚園・第3園舎

演題 『ケーベル先生と古典』
— “You must read Latin at least.” の意味 —

『ギリシャ語入門・講読AB』(火3・火4・金3) 担当 広川直幸

入門の授業では、秋学期に引き続き、水谷智洋『古典ギリシア語初歩』を用いて古典ギリシャ語の基礎を学んでいる。今学期で今年度の授業は終了である。例年通り一年かけて教科書を学んだのではあるが、今学期は詳しく文法を解説する暇がなかったことが悔やまれる。四月から、また新たに一から授業を行う。一年かけて基礎を学ぶ方針は従来どおりであるが、教科書は変更する。C. W. E. Peckett, A. R. Munday, *Thrasymachus* という、英国で出版された教科書を用いる。今でもリプリントが購入可能である。入手に時間がかかることもありうるので、受講希望者は、ネット書店などに早めに注文しておくのがよい。

講読Aでは、J. J. Helm, *Plato: Apology* を用いてプラトーン『ソクラテースの弁明』を読んでいる。1回に大体1ページ半のペースで進んでいる。内容は壮絶としか言いようがない。古典というのは敬して遠ざけられがちであるが、『弁明』はページ数が少なく、文庫本で翻訳を容易に手にすることができるので、読んだことのある人も多いであろう。それでも大意は十分に取れるかもしれない。だが、今回、改めて原典で読んでみて、どの翻訳からも原典にある凄みを感じられないことに気付いた。本当は、それこそが人を動かすものではなからうか。古典ギリシャ語を学んだことのある人は、是非『弁明』を原典で読んで、命がけの弁論の凄みを感じ取って欲しい。

講読Bでは、今学期からトゥーキューディデースを読んでいる。古代ギリシャ語散文の中で、おそらく最も難しいものである。Jones校訂のOCTは、その序文でPowellが言っているとおり、あまり良いものではないので、この授業ではイタリアで出版されているAlbertiの校訂本を用いている。それに加えて、註釈書として、一応、H. D. Cameron, *Thucydides Book I: A Students' Grammatical Commentary* を使い、受講者一名とうんうん唸りながら読んでいる。

トゥーキューディデースの文章には文法的破格が多い。文法的に破格なので、文法的に説明しようとすると、困難に直面せざるを得ない。どうも、トゥーキューディデースには予定調和を嫌う傾向があるようである。崩しの美学とでも言えようか、シンメトリーが成立するであろうという期待を裏切り、シンメトリーが成立しないであろうという期待を裏切る。これは文法というより文体の問題である。今後は文体論的な解説に力を注ぎたい。

(文責 広川直幸)

『英語一般』(月曜 14:10~15:30) 担当 浅野直樹

秋学期からスタートしたこの一般英語のクラスも2期目に入りました。前号の記事では英語を学習する動機や心構えについて述べました。今号の記事では一転して具体的な事柄について述べます。英語学習の方法論や有用な参考書やサイトにも言及しますので、よろしければご活用ください。

受講者の最初の状況が中学レベルの文法事項はだいたいわかるけれども高校レベルになると怪しいという状況だったので、1期目では高校レベル(一般レベル)の文法事項を一通りおさらいしました。こうしたニーズに合わせた参考書は書店にいけばたくさん見つかります。中をパラパラと見てみて気に入ったものを選べばよいのですが、個人的には『総合英語 Forest』(桐原書店)が見やすいと思うのでおすすめします。

受講者の希望が大学入試や論文の読解というよりは日常生活で英語を用いるということでしたので、英作文を重視しています。欲張って難しい英語を書こうとするよりも、まずは一行程度の基本的な英文を自分の手で書くことを強くおすすめします。『基礎英作文問題精講』(旺文社)がよくまとまっていて分量も多いので、これ一冊がしっかりとできれば相当な力がついています。

もちろん関係代名詞や接続詞などの構造を把握できるようになることも大事です。無闇に複雑な構造を読み解く必要はありませんが、「It is ~ for ... to do」といった基本的な構文になじむことは必須です。「構文」と銘打った参考書も書店に行けばたくさんあります。その中で一つ挙げるとすれば『英語の構文 150』(美誠社)です。ただし全部の練習問題をやろうとすると相当な時間がかかります。見出しになっている例文だけでも十分価値があります。

あとは語彙でしょう。目安としては『速読速聴・英単語 Daily1500』に収録されている語をすべて覚えていると日常生活の大部分をカバーできます。そして単語を覚えようとするときに意識してもらいたいのが語源です。「0124 一般英語」のブログ記事でも紹介した、スペースアルクの「語源学習法」や「松澤喜好の語源の扉」をお読みいただくとイメージが湧くと思います。

実際に会話をするということであれば、リスニングの練習もしたくなることでしょう。これも今ではいろいろな方法がありますが、ここでは二つだけ紹介します。一つは「NHK 語学番組」です。特にラジオは「基礎英語1~3」→「ラジオ英会話」→「実践ビジネス英語」と段階別になっていますし、とても良質です。いくら技術が発達しても内容の質が大切なには変わりありません。日本語から離れたければ「BBC learning English」などがあります。この他にも探せばいろいろあるでしょう。

自分の英語のレベルを知りたいということであれば各種の試験があります。日本の中学や高校の延長で比較的取り組みやすいのは英検です。英検2級に合格できると一つの区切りになります。リスニングをもっと重視して実際のコミュニケーション能力に重点を置きたいならTOEICです。その目的が留学用であるTOEFLとは異なりますのでご注意ください。

せっかくのやる気を生かせるように、その人にふさわしい方法を紹介するように努めています。

(文責 浅野直樹)

『漢文入門』(月曜 17:10~18:30)

担当 村田 滯

昨夏から開講している漢文入門のクラスでは、西田太一郎『漢文法要説』を用いて漢文の基本的な語法を学びながら、比較的平易な散文や詩を読んでいます。

『漢文法要説』では、各文法事項に関して、古典文献から抜き出した豊富な用例があげられており、基礎的な構文を学ぶのに有益です。クラスでは受講者の皆さんに順に例文を訓読していただき、私から解説した後、質問にお答えするという形式をとっています。

講読に用いる文章としては、高校教科書に掲載されている訓点付きの短文から始め、その後は句読点のみのテキストを用いています。これまで、『旧唐書』という歴史書に載せられている杜甫と李白の伝記や、杜甫の五言律詩を読みました。伝記を読む際には、当時の社会状況や地理が関連しますし、詩を読む場合には、詩のテーマ設定や全体の展開、個々の形容の特徴などを意識すると、より豊かな読解ができるようになります。例えば杜甫の「梅雨」という詩を読んだ時には、受講生の方から梅雨を詠った和歌との違いについてレジュメによる丁寧な指摘があり、日中の文学表現の比較にまで話題が及びました。

漢文を学習する上で大切なのは「たくさん読む」ことです。それ以上に有効な方法は無いと言っても過言ではありません。できるだけ多くの文章に触れ、その経験を通して、語彙を増やし、漢文の持つリズムを体得し、一字一字が持つ本質の意味を帰納的に把握していくこと、各々の文章が持つ文脈のみならず、そこで使われている語句が時間軸上に持っている歴史的な脈をも理解すること、さらには、各文章が書かれた際の社会・思想・文化的背景を知っておくこと、これらができれば、どんな漢文でも自分で読みこなすことが可能でしょう。

しかしながら、いきなりたくさんの漢文を前にして読もうとしても、きっと途方に暮れることでしょう。このクラスではその前の準備段階として、漢文の基本的な構造に馴染んでいただけるようお手伝いすることを目標としています。(文責 村田滯)

『イタリア語中級講読』(月曜 18:40~20:00) 担当 柱本元彦

現在イタリア語クラスで開講しているのは中級講読のみです。今回は現代作家タブッキの短編小説を読みましたが、今回は美術に関するものを選んでみました。フェデリコ・ゼーリの『わたしの好きなクリスマスの絵』(Le mie nativita')という小さな本です。頑固なアカデミズムに反抗しつづけたドライでとんがったゼーリ教授が、70歳を迎え、ゆったりくつろいで書いた文章です(1993年に雑誌連載、教授は1998年に亡くなりました)。いつもながら簡潔明快な言葉はそのまま、これ以上はないほどシンプルに絵画の魅力を語っています。とりあつかうのは、西ローマ帝国末期のモザイクから、ジョット、ジェンティーレ、ボッティチェッリ、ティントレット、ベラスケス、ティエポロまで、12点の作品です。それぞれの絵に添えられた解説はわずかにページ半ですが、興味深い語りにより耳を傾けながら多様なスタイルの相違を味わうことができます。ともかく今回の学習テーマは、美術解説に頻出する用語や言い回しに慣れることです。イタリア語で書かれた美術関係書には難解なものが多いのですが、将来そういった文献を読むための格好の入門書と言えます。(文責 柱本元彦)

『フランス語入門』(水曜 10:40~12:00) 担当 上尾真道

フランス語の学習の過程には、いくつかのつづりやすい壁があります。その第一は、秋学期の際に書いた通り、まず発音とつづり字の関係の習得です。なにしろ、カタカナで考えている限りはまったく身につかないような新しい音と向き合わなければならないので、これは並大抵のことではありません。さてその次に会うであろう壁は何であろうかといえば、おそらく動詞の活用でしょう。

まずフランス語では、一人称、二人称、三人称の単数・複数の別に従い、主語が六つのカテゴリーに分かれます。日本語話者の私たちにとっては、まず「主語」の人称性というのは、実はわかりにくいことであろうと思います。主語を省略することはしょっちゅうですし、さらに一人称にしてみたところで、「私」、「僕」、「わし」、「俺」などなど山のようにあります。また、二人称でも、普段、私たちは相手を名前と呼ぶことのほうが多く、「あなた」や「君」などはそれほど使うことも少ないのではないのでしょうか。フランス語を使えるようになることを目標としておくならば、まずはこの人称に関する感覚の違いを意識し、それを覚えようとするのが重要でしょう。

さらに、フランス語の動詞は、一つの時制につき、この六つのカテゴリーに応じた六つの活用の形があります。法則に則って導き出せるものもありますが、不規則で、いちいち細かく覚えていかなければならないものも多く、ここで根を上げてしまう人も多そうです。乗り越えるひとつのコツは、目と頭だけに頼るのではなく、声と音で馴染んでいくというものです。特に重要な動詞であればあるほど、それだけ頻繁に使用することになるので、口をついて出てくるくらい繰り返し声に出して読んでおくことが大事です。こうして口で活用を覚えつつ、上で述べたように、適切な主語がぱっと選べるようになれば、フランス語で話をするための大事な一歩が踏み出せたということになるかと思えます。(文責 上尾真道)

学校法人北白川学園 北白川幼稚園・山の学校 〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 41
電話 781-3215 FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通) 電子メール taro@kitashirakawa.jp